
LAST SCENE

天川充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LAST SCENE

【Nコード】

N1637K

【作者名】

天川充

【あらすじ】

中学2年の4月、慶太たちのクラスに良雄が転校生として入ってくる。おどおどした表情で自己紹介をした良雄に慶太は声をかけたが、返事がない。その後クラスの班編成で慶太と良雄と誠と祐一と愛美は同じ班に。ここから一人ぼっちで寂しい転校生を何とか楽しませようと友達の輪が出来ていくことになる。

より一層仲良くなろうと慶太は無理やり良雄を陸上部に入部させる。スポーツをやったことない良雄はその練習のきつきについていけず逃げ出してしまう。しかし慶太の「運動会で注目を浴びたくないの

か」の声に同調し、良雄は頑張ろうと努力することを決める。もういじめられっ子は嫌だと誓いながら。

運動会が始まる。今まで頑張ってきた力を全てに出し、慶太たちに励まされながら1位でゴールする。そのとき夏希が叫んだ声援から良雄は恋をしてしまう。

遊びに行ったりおしゃべりしたりと良雄と慶太には深い絆が生まれる。ここで初めて慶太は夏希のことが好きだということを聞かされる。そんな生活が続くといいなと思っていた矢先、良雄が急にまた転校という事態になる。

良雄の恋を実らせようと、クラスみなでお別れの記念と呼びかけて良雄と夏希が主役の映画を作ろうと企画する。祐一が脚本を作り、ほかのみんなが演技をする。そして映画のラストシーンで良雄は夏希に告白することになる。

「ほら慶太、早くしないと遅れるよ」

「待ってよ姉ちゃん」

俺は制服のネクタイをしめながら食パンを口に加えて追いかけた。美里姉ちゃんはピリピリしている。毎日眉間に皺を寄せては怖い顔で俺を睨んできた。大して頭もよくないくせに無理してレベルの高い高校を狙おうとするからだ。何でも憧れのサッカー部の先輩と同じ高校に行きたいらしい。受験と恋愛を一緒くたにするなんて女なんて単純だなと飽きた表情で俺は姉ちゃんを心の中で馬鹿にしていた。

中学3年生の女の子の悩みは深刻だそうだ。周りに流されてダイエットまで始めている。やせたりきれいになったりということは女の本望だと言うけれど、所詮は周りに流されているだけ。テレビで騒がれ、周りの子がやり始めると自分もやらなくちゃいけないような錯覚に襲われる。そんなことしても無駄だと言うことならば殺氣が俺に向けられる。そんなのはごめんだ。あと1年で俺も女子のそんな姿を見るのかと思うと、憂鬱になってきた。

桃色の花びらがゆらゆらとうれし泣きでもするように地面に向かって枯らしていく。一年で一番眠い始業式の朝、俺たちはいつものように何事もなく変わりゆく町並みを眺めていた。変わることも恐れず変わるはずがないこのときを当然とでもいうかのように。

クラス替えでもあれば別なのだろうが、あいにくうちの中学は全クラスが3年間持ち上がりで何の変哲もないのが現状だ。平凡な毎日についての時代も中学生は暇を持て甘している。それは始業式当日でもそう簡単に変わるものではないのだ。休みの日も塾に行きいい高校に入ろうと多忙の日々を送っていて余裕のないものと、放課後友達と何をして遊ぼうかと一日中考える暇を持て余しているものとの二極化が思春期の世代の間では進行していた。

陸上部の部室を覗いてみるが、誰もいない。そりゃそうだ。何も始業式の朝まで練習したいとは思わない。うちの学校みたいに弱小の陸上部は夏にしか大きな大会に参加しない。それも記念受験みたいなものだ。負けるとわかっていて試合をするくらいなら活動しないほうがましとまるでやる気のない部員ばかりが集まっているというのも原因があるのだが。今は新入生の勧誘の準備をするくらいしかすることもないので、放課後だけ活動している。

だがこの日はなぜだか雰囲気違った。教室に入ると、クラス中がなにやら騒々しい。いつもはばらばらに輪を作るグループが一箇所に集まって同じ話題の情報交換をしているようだった。花粉症で普段はくしゅくしゅんと鳴り響く教室もそれが気にならないほどに話し声が聞こえる。

「誠、今日って何かあったっけ？」

「なんだ慶太、お前知らないのか？ 転校生が来るって噂で持ちきりだってのによ」

「転校生？」

俺は誠に顔を近づけて目を見開いた。俺たち三中には滅多に転校生なんて来ないのだ。なぜなら私立でほとんどが小学校からの持ち上がりだから。それだけに外部から入ってくることは珍しいことだった。どんなやつが入ってくるんだろうと胸をときめかせているのも無理はないのだ。

こんなときのクラス中の頭の中に浮かぶ妄想はろくなもんじゃない。男子はどんなかわいい子が入ってくるんだろうと自分が理想とするラブコメを作り上げる。実際にかわいい女子だとしてもその女子と恋人になれる人は多くて1人しかないというのに。このときの想像力には感心させられる。週刊少年ジャンプで連載している漫画家のようにいとも簡単に美少女キャラクターを自分好みに描き出す。桂正和にでもなったかのように。もしこれで文才があったのなら天才売れっ子作家だ。

女子は女子で白馬の王子様を連想させ、キラキラしたありもしな

い視線に目を輝かす。ジャニーズ事務所所属のその転校生はいつのまにか自分と恋に落ち、お姫様になる夢を見る。童話の中では王子様に見つけられてめでたしめでたしとなっているけれど、ほとんどの女子はシンデレラの姉たちのように焼死してしまう運命にあるというのに。

なぜこうまで転校生というものは幻想を抱かせるのだろうか。憧れが大きいからその分的外れだったときのショックは大きい。大抵はどこにでもいるようなどうでもいい地味なやつが教壇の前に立つというのに、誰一人そんなことはお構いなしに芸術家気取りの物語を作り上げているのだ。おもしろいやつで友達になれば誰でもいいと考えている俺には縁のない話だった。

「あ、来たみたいだぜ」

誠が前を向いて姿勢を正すと、ガラガラッとドアの開く音がした。始業式とか入学式とか卒業式とか何か行事がない限り着ない真っ黒なスーツをびしっと決めた髭面の梅宮先生がいつも通り眠そうな顔を浮かべながら教壇に立つ。その膨れ上がったお腹がスーツだと余計に目立ち似合わないあと思っただけ吹き出しそうになってしまう。いつもは先生が来たことなんてお構いなしにガヤガヤと話し声が絶えないのだが、今日は違った。一斉にシーンと話し声が鳴り止み、神妙な面持ちで発表を今か今かと待っている。その沈黙は1分以上続いただろうか。俺はその雰囲気がたまらずその場で手を挙げた。

「先生、転校生が来るってのは本当ですか？」

「ん？何だ桂木、お前から質問があるなんて珍しいな。・・まあそう慌てんな、転校生は始業式の後だ。ほら、わかったらとっと体育館に行くんだぞ」

「はい」

ボタンボタンと廊下に響く足音とともに2階の体育館めがけて駆け抜けていく。俺もこのときはどんな転校生が来るんだろうと胸をそわそわと躍らせていた。

転校生のイメージを膨らませていれば長くて辛い校長の話も何てことない。不思議なもので普段何の変哲もない日常に何か特別なイベントがあるクラス全員が一致団結して目の冴えた表情を見せるものだ。

今日も同じ。誰もが輝いた瞳で頭をフル回転させながら転校生の妄想を膨らませる。俺たち中学生は好奇心旺盛でいつだって変化を求めているんだ。変わることもなんてないと思いつつ、事件がおきて欲しいと願う。平凡な日常に飽き飽きしている。何事も恐れずに時には大人ぶり時には子どもっぽく。そんな思春期の真っ只中をただ謳歌しているのである。

「おい、誠。慶太」

「何だよ大、そんな慌てて」

俺は大に体を向けて小声で囁いた。

「新情報だぞ。どうやら転校生は男らしいぜ」

「男？マジかよ。せつかくかわいい子が来ると期待してたのになあ」

誠は残念そうに肩を落として言った。

「そんなこと言って、誠はもてるからいいじゃんか。4組のアイドル加納京子も狙ってるって話だぜ」

「俺は別に彼女が欲しいってわけじゃねえんだ。女子に友達作つてけば何かと便利だろ？そんなことより慶太、お前いつも女なんかいらねえとか言っときながら強がりだったのかよ？」

「い、いいじゃねえか。俺だってな、女の一人や二人・・・。大体うちのクラスの女子はガキばっかなんだよ。だから女として見れねえって言うてんの」

「はいはい、わかりました。・・・で大、お前どこまで転校生のこと知ってたんだよ？」

大はやれやれと呆れて、珍しく落ち込んだ表情を追いやって笑顔を作りながら声を整えた。どうやら転校生が男子だと知って一番ショックを受けていたのは大らしい。体全身からどよーんとした空気が

が滲み出ている。

「それがさ、前の学校でいじめられてやむなく転校してきたらしいんだよ」

「何だよ、それじゃあ暗いやつなのか？」

「まあいいじゃんか、慶太。祐一だって同じようなもんじゃんか。な、祐一」

誠が前にいた祐一の背中を押すと、驚いた反応をして祐一がこっちを向いた。眼鏡の下表情からは怪訝な印象を受ける。

「な、何だよ。今、式の最中なんだから静かにしろよな」

「何言ってるんだよ。相変わらず祐一はまじめだなあ。お前は気になんねえのかよ、転校生のこと」

誠の問いかけに一呼吸置いて祐一は言う。

「そりゃあ気になるよ。けど、気になったってしょうがないじゃないか。式が終わるまでは会えないんだし」

「そりゃそうだけだよ」

祐一は誠の困った表情を見届けるとすぐに前を向きゲームボーイアドバンスを取り出して遊び始めた。本当にまじめだか何だかよく分からないが、これで学年3位の成績なんだから恐れ入る。

健康に気をつけてなんて月並みな教頭の挨拶の末、始業式が終わった。みんな一斉に長い行列を作って体育館を後にする。本当にどうして行事が終わった後の廊下はこんなにも混むのだろう。俺たちや押しくら饅頭してるわけじゃないんだぞ。もっと少しずつ帰らせるなど改善する手はないのだろうか。それともそんなに待つことすらできないとでも言うのだろうか。それはそれで我慢を教えてこなかった大人たちの怠慢の結果なのかもしれない。

俺たちはぺちゃくちゃとおしゃべりしながら教室に戻り、机に座った。俺の周りに誠と大と祐一が集まっている。もう転校生の話題に飽きた俺たちはいつのまにか昨日見たバラエティ番組の話にスイッチが入っていた。こういうとき盛り上げるのは大の役目だ。

「でさ、太田のボケを毎回品川がフォローするんだよ。そのときの太田の顔芸が面白くてさ」

大はいいどもの増刊号で見た話を得意気に話す。コメディアンの顔芸を真似たのを見て俺たちは合わせるように大笑いをしていると、ガラガラッと扉が開いた。

「わ、先生だ」と大が大きな口を開けて声を挙げた。

一斉に席に着こうとざわざわ騒がしくなる瞬間だ。俺たちのクラスでは先生が来るまでに席に着いていない生徒はバツとして掃除当番を任じられるのだ。本当に誰がこんなルールを考えたのかはわからないが、1年の入学式のときに先生が伝統だとか抜かして黒板の脇に貼り付けたのだ。今の時代にこんな体罰じみたことをやってPTAが殴りこんでこないというのも凄いと思ったが、だからこそ教師たちはストレスをためずに満足のいく教育を続けていくことができるのかもしれない。

先生は入ってくるなり不気味なくらいの満面の笑みを浮かべながら教卓の中央に立った。

「おーい、入っていいぞ」

みんなの視線はおのずと教室のドアに集まった。ゆっくりとゆっくりとドアが開く。それは数秒にも数分にも感じられた。転校生が開けるのを躊躇したのも事実だ。でもそれだけでは言い表せないくらい俺たちには待ち遠しいという気持ちと怖いという気持ちが交互に入り乱れていたのである。

そこに現れた転校生はいい意味でも悪い意味でも俺たちの期待を裏切っていた。身長は中学2年生としてはやや大きめの160センチちょい。体格はやや痩せ型だが、子どもっぽさの中に整った顔をしたもてそうな風貌。

それでいてどこか頼りなさげで覇気がない。うつむき加減な表情のせいだろうか。暗い印象も見え隠れする。これが今までいじめられてきた原因なのだろう。とても弱そうには見えないが、自分に自信がないためにいじめの対象にされてきたのだろうと俺は子どもなが

らに感じていた。

先生が黒板に「葉山良雄」と大きく豪快な字で書き、転校生を紹介した。良雄は何だか照れくさそうに「葉山良雄です、よろしく」と告げると、再びうつむき俺たちの視線から目をそらした。

先生から良雄は俺の隣の席に案内されて俺が「よう」と挨拶しても返事が返ってくることはなかった。無言のまま良雄は席に座りまるでいじめに遭うことを警戒するように周りをキョロキョロすると、姿勢を正して先生の顔に視線をやる。

とにかく俺にはとても変わったやつに見えて何だか放っておけなかったのだ。俺たちは出会った。出会ってしまったんだ。これからかけがいのない友情が芽生えるなんて思うこともなしに。ただの偶然なのかそれとも運命なのか。流れに翻弄されながらひたすらに前だけを向いていた思春期という疑うことも知らないあのときに。

翌日には班決めと委員会・係決めのためのホームルームが行われた。最初は俺たち同様に何とか友達になろうと声をかけてきたクラスメイトも、おどおどして言葉を発しない良雄の態度に半ば諦めた感じで今では誰も話しかけようなんて無駄なこととはしない。まさに四面楚歌状態だ。

俺たちのクラスの班決めは友達同士グループを組み、もし多すぎたら2つや3つに分けて行われる。男女のバランスが偏ってもいけないからうまく調整するのだ。

俺は誠と祐一と大の輪の中にいる。女子も幼馴染の愛美とその友達の夏希に決まりそうだ。周りを見渡すと大方いくつかのグループにまとまっているようだ。わいわいがやがやと騒がしく声がする。ただ一人を除いては・・・。

「誰か、葉山君を班に入れてくれる人はいませんか？」

学級委員の愛美が叫ぶ。

——良雄だ。良雄が一人ぽつんと机に座ったままおろおろしている。愛美はその隣にやってきて同情のまなざしで良雄を見ていた。何がそんなに怖いんだ。はっきりと意思表示をしろ。ああ、いらつく。こういうやつを見ると無性に腹が立つ。誰かが誘ってくれるのを待っているなんて何てずうずうしいんだ。まだ誰とも手を組まないと決め込んでいる一匹狼タイプのほうがいさぎよくてかっこいい。

俺は思わず良雄の目の前まで行き、怒鳴り込んだ。愛美は驚いて俺に場所を譲る。

「お前、いい加減にしろよ。俺たちがどれだけ困ってんのか考えたことあんのかよ？ そんなんじゃないつまで経っても友達なんかできねえよ。またいじめられて終わりだ。ま、お前にはそれがお似合いなものな」

やってしまった。ついスイッチが入ってしまい止めようがなかつ

た。言い放った言葉がリフレインして頭の中を駆け巡る。それは後悔と爽快感という念だった。

みんなも同じ気持ちだったんだろう。よくぞ言ってくれたという感謝の気持ちとともに、言っではいけないパンドラの箱を開けてしまった俺に対して温かくも冷たい視線がぶつけられる。

表面上は穏やかでも内面が冷たい友達の笑顔ほど怖いものはない。良雄は俺のものすごい剣幕と怒鳴り声に泣き出してしまい、俺は完全に悪者扱いだ。こっちが泣きたいくらいだ。そう思ってもこの場面で涙を流すわけにはいかなかった。

夏希が良雄の傍によって「大丈夫？」と声をかけると、俺の目をきつく睨んだ。その瞬間、パンツと威勢のいい音が俺の左頬めがけて飛びこんできた。

「いってーな、何すんだよ」

「自分の胸に聞いてみれば？」

それ以上言い返せなかった。言い返せるわけがなかった。悪気がなかったとはいえ、これは俺が全面的に悪い。クラスメイトからは「仲間に入れてやれよ」という声がしきりに飛び交っていた。

断る理由もない。ここで断ったりしたら今度は俺が仲間外れの対象にされるかもしれない。しぶしぶ俺は良雄を受け入れた。「ごめん」という一言と涙を拭うハンカチとともに。

休み時間。班の交流を深めようと良雄の席を囲んで班員のメンバーとおしゃべりをしている。というのも転校生の良雄は今日の今までまともにクラスメイトと口を利いたことなどないのだ。

同じ班になったのも何かの縁。嫌でも1年間は一緒に行動を共にしなきゃいけないんだ。良雄を無視して事を進めるよりも仲良くなっ
て一緒に笑いあったほうが楽しいに決まっている。それは俺だけじゃなくほかのみんなも同じ気持ちだったようだ。

「ねえ、葉山君は何か趣味ってある？」

先制攻撃を仕掛けたのは愛美だった。これに対して良雄の返答は「

べ、別に・・・」。いきなり途切れた会話のキャッチボールに困惑しているところへ次に前に出たのは大だった。

「ばかだなあ、そんなこと聞いたって無駄だって。ちょっと愛美、こっち来いよ」

「何?」と言って愛美が大の目の前に立つと大は「それっ」と言っ
て愛美のスカートをめくり上げた。熊さん模様のパンティーがおお
っぴらになって、良雄は顔を真っ赤にしたまま目線をそらす。

「ちょっと、何するのよ」

「サービスだよ、サービス。ほら、良雄もうれしがってるぞ」

茶化す大に周りが気になり愛美は顔を真っ赤にすると、殺気立っ
て逃げる大を追い駆け回り始めた。まるで夫婦漫才みたいだ、と思
い俺たちも思わず吹き出してしまった。

次に良雄の前に立ったのは祐一。祐一は手に持っていたゲームボ
ーイアドバンスを良雄の机に置いて言う。

「あの・・・僕、藤堂祐一。僕もね、君と同じようにいじめに遭っ
てたんだ。僕、背ちっちゃいし、メガネかけてるからそのことでか
らかわれて。パソコンオタクとかゲームオタクとか言われて毎日殴
られるし、モノはなくなってるしで大変だった。何度も死にたいと
思ったんだ。だけど、そんな僕を慶太たちが受け入れてくれたから
立ち直れた。だから良雄君ももっと心開こうよ。これは友達の印。
今日一日貸してあげるから遊んでみなよ。面白いんだよ、このゲー
ム」

祐一の気持ちは良雄に届いたのだろうか。良雄は「ありがとう」
と祐一の目を見て答えると初めて笑顔を見せた。でもそれっきり。
再び良雄はうつむいたまま顔を伏せてしまった。頑固な転校生の心
を掴むことは簡単なことじゃないらしい。

「4番バッター行きます」

そう冗談をかまして前に出たのはこの中で一番大人びた誠だ。

「モノマネシリーズ・・・松井秀喜」

誠は今まで俺たちにすらやったことがない松井のモノマネをかま

した。本人は自信満々で顔と仕草を練習していたようだ。しかし、これがいかに似ていなかった。周囲には失笑が流れる。当然、良雄の表情も暗い。無表情のまま固まってしまっている。

誠もやっちゃったと言わんばかりに苦笑いを浮かべ周囲の寒い空気を察知したようだ。「俺、やっちゃった？」とみんなの顔を見ながら尋ねると、俺たちは黙って首を縦に振った。誠は相当ショックだったようで、ブルーのオーラを漂わせながら俺にバトンタッチをした。

そしてとうとう俺の出番。

とはいえ俺に秘策なんてあるわけがなかった。ただのスポーツ好きで周りからはお調子者の熱血少年と思われている俺には一発芸なんて持ち合わせちゃいなかった。みんなの芸を見ながら考え続けても答えなんて見つかりはしなかった。

こうなったら気合で体当たりするしかない。俺は覚悟を決めて良雄の前に立った。

「良雄、いいか俺の顔をずっと見てろよ」

良雄は「うん」とだけ言うと、無表情を保ったまま鼻の辺りをじっと見つめる。俺はふーっと息を吸い込んで良雄の注意をそらすと、その瞬間一気に「にい」と変な顔を作った。頬を膨らませて右手で横に引っ張り左手で鼻を吊り上げる。目は白目を向きその状態で眉間にしわを寄せ舌を出した。「良雄、笑ってくれえ」と叫ぶ。

「何だそれー」

大の大きな笑い声とともに見ている者全てからどつとどよめきが走った。爆笑の渦が起こる。

俺は恥ずかしがりながら良雄の顔を見た。しかし含み笑いこそ窺えるものの、心の底から笑っているというほどではなかった。失敗だ。俺は誠に励まされると小声で数秒ほどの反省会を開くことになってしまった。

こんなやつと友達になれるわけないよという空気が流れ諦めかけていたそのとき、前に出ていったのは夏希だった。愛美の「夏希には

無理だつて」という声も聞かずに良雄の机の目の前に立った。だがなぜか机から2歩ほど引いた位置で立ち止まっている。

夏希は良雄の顔を見てにこっと笑い、後ろに振り返って顔を伏せた。何だろうと見守る俺たちと良雄。ほんの数秒だったと思う。夏希が良雄の机に向かって振り返ったとき衝撃が走った。

「コマネチ！」

夏希はビートたけしのモノマネをしながらさっき俺がやったような顔芸をやって見せたのだ。

瞼の内側をめくりあがらせ鼻の穴を広げ、頬を膨らませた顔。その上女の子がやるような類のものではない股を広げた一発芸。かわいい女の子の素顔からは想像できない天然の入った夏希の行動に一瞬の沈黙が走った。

しかし次の瞬間、どつとどよめきが響く。人は予想外なことに対してのみ笑うのだ。俺はこの瞬間、確かにそう思った。

爆笑の渦が鳴り響く。俺たちの班だけでなく、周りで様子を見ていたクラスメイトまでもが目を細めて口を大きく開け、夏希に指を差して笑う。夏希というキャラクターと芸とのギャップが異様におかしく、俺たちは笑いが止まらなくなった。夏希がやったからこれだけの笑いを誘えたのだ。今まで無表情で心を開かなかった良雄でさえもくすっと夏希が恥ずかしがる様子を見て笑っている。

大成功。そう思った瞬間、始業を伝えるチャイムが鳴った。

放課後。始業式からまだ2日目の今日は午前中で授業が終わる。授業といっても本格的に授業が始まるのは来週からで、一週間最後の金曜日の今日はホームルームだけで全てが終わる。近頃学力低下がどうかニュースで言っているけど、そんなの大人が勝手に考えたこと。俺たちにとっては遊べる時間が増えてとっても嬉しいことなのだ。

俺の机を囲んでいつものメンバー、誠と祐一と大と愛美と夏希と一緒ににお弁当を食べている。今家に帰ったって家には誰もいない。親

私たちはみんな共働きに出ていて俺たちは鍵っ子だった。俺たちにとってみんなと教室で昼食を取ってから一緒に遊びにいくのは日課となっていた。

そんなとき良雄の姿が目について俺は良雄に声をかけた。

「何だよ、もう帰るのか？」

「う、うん」

「何か用事でもあるの？」

夏希が首を横にかしげながら良雄に問いかけた。良雄は黙って首を横に振る。

「だったらさ、俺たちと一緒に飯食わねえか？な、いいよな慶太」
誠の言葉に首を縦に振ると、困ったように良雄が口を開いた。

「だけど・・・僕、お弁当持ってきてないんだ」

小さなぼそぼそといった声でそう言っていてうつむく良雄の表情に一瞬俺たちは言葉を失った。どう声をかけていいのかわからずにいると、祐一が良雄の後ろまで歩いていって背中を押した。

「大丈夫だよ、僕のお弁当分けてあげるから。そんなことより一緒におしゃべりしよう、ね？」

いじめられっ子の気持ちはいじめられっ子にしかわからないのか、祐一の優しい言葉に良雄は心を許したようだった。祐一が良雄の席の椅子を自分の隣に引っ張ってくると、祐一に誘導されながら良雄は席に着いた。祐一は持ってきていたパックの中におかずを入れて良雄に渡した。俺たちもこぞっておかずを差し出すと、あつという間にパックの中はみんなの友情で満杯になった。良雄の口から「ありがとう」と満面の笑みが零れるのを見て俺たちは屈託ない笑顔を返していた。

昼食を取り終わると、俺たちは大の提案でカラオケに行くことになった。もちろん良雄も一緒だ。カラオケボックスに行く途中、俺たち男子は女子2人と離れてとぼとぼと歩く良雄に声をかける。
「なあ、もううちのクラスには慣れたか？」

俺の囁きに良雄は首を横に振る。相変わらずこいつは絡みづらい。今までいろんな友達を作り、そのたびに苦労してきたがこいつは今まで出会った中で一番の強敵だ。少しずつ、少しずつ俺たちには心を開いてきているみたいだがそれも微々たるものだった。

「良雄、お前何か得意な曲ある？」

誠の問いかけに再び困惑した表情を見せた。

「恥ずかしがることないぜ。祐一なんてな、いつもアニメソングかゲームの主題歌ばかり歌うんだから。聴いてるこっちが恥ずかしくなるよ」

「ちょ、ちよつと・・・僕のことはどうでもいいだろ？」

「な、こいつ照れてやんの。面白いだろ？」

誠の茶化するような笑い声につられて思いつきり笑いが飛び出した。良雄も俺たちに合わせるように口を手で押さえながら笑っていた。大がその拍子に後ろを振り返り女子の顔をチラッと見ると、笑いをこらえながら良雄に小声で囁いた。男子にだけ聞こえるような声で円陣を組んで話す。

「お前さ、夏希のことどう思ってるの？」

はっ？大の唐突な発言に良雄はもちろん、一緒に聞いていた俺たちまで驚きを隠せなかった。誠が聞き返す。

「何だよ大、菊原がどうかしたのかよ？」

大は不気味な笑みを浮かべると得意げに言った。

「みんなは気付かなかったのかよ？良雄は夏希のことが好きなんだぜ。ほら、夏希が近くに寄ったときと俺たちが寄ったときじゃ態度が全然違ってたじゃん」

俺たちは思わず吹き出してしまった。よく見ると良雄の顔が真っ赤だ。凶星なのか？まだ転校してきて2日目だというのに一目惚れしたっていうのか？その疑問を聞き出そうとしたとき、祐一がそつと声を発した。

「本当なの？」良雄はその言葉に小さく頷く。「誰にも言わないで」と呟きながら。誠が言う。

「なーんだ、そういうことなら俺たちも応援するよ。な、慶太？」
「あ、もちろん。何なら手伝ってやってもいいぜ。だけど、そんなにしゃべらないんじゃない？嫌われちゃうぞ。せめて俺たちと一緒にのときだけでもはつきりしゃべること。わかったな？」
良雄は首を縦に振ろうとするとはっと気がついて「うん、ありがとう」と声を返した。照れながらも眩しい最高の笑顔で見つめながら。

カラオケボックスに入って十五分ほどが過ぎた。良雄は俺たちのご厚意で夏希の隣に座っているためか終始汗を垂らしながらがちがちな状態だ。一言も声を発することはなくズボンの裾を強く握りしめている。シャイな良雄には少々行き地獄だったかもしれない。

反対の隣に座っていた誠が言う。

「おい、ちゃんとアピールしねえと気を惹けねえぞ」

「で、でもお・・・」

「ねえ、何話してるの？」

ぎくっ。一瞬血の気が引いた。夏希がこそと良雄と誠が話しているところへ割り込んできたのだ。引きつった表情を正して誠が言い返す。

「えっと、そうだな・・・おい慶太」

こともあろうかその隣で2人の様子を見ていた俺に投げやがった。なんて無責任なんだ。予想だにしていなかった俺は声を上ずらせながら言う。

「えっと・・・そうそう、良雄が夏希とデュエット歌いたいってさ。な、良雄？」

苦し紛れの返答に良雄はもちろんその場にいたみんなは目を丸くした。俺は良雄に目でごめんと謝りながら唇の動きで「歌え」と合図をしていた。

「いいよ、歌おう。何がいい？」

夏希に笑顔で見つめられると良雄はゆでダコみたいに真っ赤になった。どうやら本当に惚れちゃまっているらしい。大の「キンキなんか

いいんじゃない？」という声に夏希は愛美からマイクを渡されると良雄の手を握った。「いこ」という夏希の声に返事をする良雄は今にも蒸発しそうなくらいまだ4月だというのにだくだくの汗が体中から溢れ出ていた。

かよわい体から漏れる天使のような美声で歌手になってもおかしくないと思わせるくらいに力量を持つ夏希と、無口でただでさえうまくは聞こえないのに加え緊張で声が裏返り周りから見れば音痴と言えるであろう良雄の声。

2つの対照的なキンキッズがシンクロし、ボックス内に妙な空気が流れ込む。パートを交換するとき夏希が笑顔で良雄に顔を向けたときの良雄の作り笑いが面白くて、必死にお腹の底から湧いてくる笑い声をこらえていた。俺たちの気も知らずに愛美一人だけ後ろを向いて爆笑していたが。

歌い終わると、俺たちは2人に向かって盛大な拍手で迎えた。何も知らない夏希はいつもの天然振りを発揮し、「ありがとうー」なんてマイクに向かってはしゃぎながら左腕を突き上げて叫んでいる。どうやら普段おとなしい人ほどカラオケで熱唱した後はハイテンションになるらしい。

「よくやった」と誠と俺が良雄に声をかけると、良雄はそっと肩をなでおろすようにソファに腰を落とした。まるで試合後のボクサーみたいにぐったりと前かがみに倒れこんだ。その様子を見ることなしに大が次の曲をセットし、マイクを握りしめて前に立っていた。

1時間半ほどが過ぎてカラオケを終えると解散。結局良雄はあの1曲以降はマイクを持つとはしなかった。家の方角が違う良雄は同じ方角の祐一と、夏希と誠と大もそれぞれの帰路に散り、俺は幼馴染の愛美と肩を並べて歩いている。

「今日は楽しかったね。メンバーも一人増えて」

愛美のその言葉には少しとげがあるように思えた。「え、うんそうだな」と答えると、愛美は不気味な笑みを俺にぶつけた。

「でもあれはないよねー、あれは」

「・・・あれって？」

「何よ慶太、私が気付いてないとも思ったの？あれじゃあ葉山君がかわいそうだよ。だくだくだったじゃん」

「な、何だわかってたのかよ、良雄が夏希に惚れてんの」

「あつたり前でしょ。あれだけあからさまによそよそしい態度を取ってれば誰だって気付くよ。ま、鈍感な夏希本人は気付いてないみたいだったけどね」

俺がほっとため息をついたのを見て愛美が強い口調で言う。

「でも夏希のこと好きだっていう男子って多いんだよ。知ってる？ファンクラブまであるくらいなんだから。夏希は興味ないみたいだね。あんたたち、本気で葉山君と夏希をくつつけるつもりなの？」

俺は数秒の間次の言葉を続けるのを躊躇した。本当にそんなことできるのだろうか？夏希は良雄のことをどう思っているのだろうか？そもそも無理やりにくつつけることがいいことなのだろうか？そんな思いが錯綜したからだった。だがすぐにその答えは出た。

「それで良雄が普通に友達としてクラスに溶け込むならいいじゃん。別に失敗したっていいんだよ、良雄が自信を持ってくれば」

愛美はふーんと意味深な顔を浮かべると、それ以上聞き返してくることはなかった。何だか納得できない様子でいる俺の顔を見てひたすら意味もなく笑い声を上げながら帰路を歩く2人の後ろには暮れゆく夕日がさんさんと照らし出されていた。

月曜日。今日から本格的に授業が始まる。学校指定のバッグにぎつしり詰められた教科書が重くのしかかる。いつも通り始業5分前に教室に入ってくると、なにやら騒がしい声が聞こえてきた。

「おい何かあったのか？」

誠に尋ねると俺の机の隣、つまり良雄の席を指差した。夏希が椅子

の上に座って良雄の顔を見つめている。

いきなり良雄が告白するのかと思って見ていたらどうやら違うようだ。良雄はスケッチブックを抱えながら照れを見せずに真剣な眼差しで夏希の顔を見ては目を離しまた見ては離しを繰り返していた。

「できたー！」

「えっ、本当？見せて見せて」

良雄が初めて見せた歓喜の叫びに呼応して夏希はスケッチブックを受け取ると、ひっくり返して食い入るように目をやった。それを見る俺たち聴衆も夏希の傍に近寄ってスケッチブックを覗き見る。そこには鉛筆1本によって描かれた夏希のデッサン画が浮かび上がっていた。

髪の毛一本一本繊細に描かれた線、柔らかいタッチで描かれたラインにパッチリとした瞳、夏希の優しい表情が現れた陰。

その一つ一つが丁寧にそっくりに映し出されていた。まるで本人が生き写されたように鮮明に力強く。とてもいじめられっ子でおとなしい良雄によって描かれたものとは思えないほど誰が見てもうまいと言える芸術作品がそこにはあった。

「わあ、ありがとう」

夏希は笑顔を返してスケッチブックから自分の顔が描かれた似顔絵を破り胸に抱えた。

「良雄にもこんな特技があったんだな」

俺は誠に小声で囁く。

「何でも前の中学で美術部に入ってたんだってさ。コンクールでも賞を取ったことがあるらしいぜ」

へえ、とすっかり俺は感心させられてしまった。次から次へと良雄に自分の似顔絵を描いて欲しいという女子が殺到する。まさか今まで俺たち以外良雄に話しかけるやつなんていなかったのに、たったこれだけでこんなにも人気者になるなんて思わなかった。したって意味がないとわかっていながらも少しだけ嫉妬していた自分自身に失笑してしまった。

昼休みになると、いつものように俺の席を囲んでお弁当タイムが始まった。今日は良雄も躊躇することなく一緒に座っている。当然のことながら話の中心は今日も良雄に集まった。

「お前、前の学校で美術部だったんだって？」

俺の問いかけに「うん」と頷く。心なしか自信を持って声が大きくなっているように聞こえて嬉しくなった。

「じゃあさ、この学校でも美術部に入るの？」

「ううん、こっちの学校では違うクラブに入ろうと思ってるんだ。絵を描くことは趣味でもできるから」

愛美に対しての返答に俺は再び「何で？」と言葉を投げかける。

「・・・僕、前の学校でいじめられてたから」

聞かなきゃよかった。今日の良雄の明るさを見てすっかり忘れていた。沈むような空気が吹き抜ける。重くのしかかる沈黙に何とか良雄を再び塞ぎこまないようにしようと言葉を考えては消え、消えては立ち上がる考えを模索していた。

すると誠が立ち上がった。

「ならば、俺たちと一緒に陸上部やらねえか？陸上部って言っても週に一回だけで朝練とかもねえし、大会も地区予選すら突破できねえほどの弱小中。運動神経悪くたって誰も気にしないよ。それに何より俺と慶太がいじめられそうになったら助けてやれる。な、慶太？」

「あ、そうそう。そうだぜ、陸上部に入れよ。その方が俺たちも楽しいしさ、な？」

良雄はうんとだけ答えて頷いた。それが本心だったかはわからない。もしかしたら俺たちの勢いに押されてしぶしぶ了解しただけかもしれない。単なる自己満足かもしれない。それでも心の奥底に良雄と本当の友達になりたいという想いがあったことは事実だった。そこには第一印象で感じたようななむかつくやつというイメージがなかったからかもしれない。

放課後。帰りのホームルームが終わり廊下にはバタバタと足音が鳴り響く。俺と誠は緊張からかびくびくしている良雄の背中を押して陸上部の部室を目指した。

ガラガラッとドアを開けると、3年生の先輩が待っていた。毎日練習の前にこうしてミーティングが開かれるのだ。

「遅い。何分待ったと思ってんだ、桂木、笹生」

部長の怒鳴り声が耳に突き刺さった。俺と誠はぺこぺこ頭を下げながら言葉を発する。

「すみません、その、うちのクラスの転校生が入部したいと言っていたので連れてきたら遅くなってしまいました」

「入部希望者？その後ろに隠れてるやつがそうか？君、名前は？」

俺の言葉に反応した副部長の問いかけに良雄は怯えて後ろに隠れたままだ。俺が小声で「ほら、名前」と囁くと、ようやくゆっくりとうつむいたまま前に出た。

「あ、あの・・・僕、葉山です・・・葉山良雄」

「・・・葉山君か。まいいや、そこに並びなさい」

「はい」

相変わらず副部長の敬語を使ったときの目つきは怖い。すっかり良雄もびびってしまったようだ。ぎこちない動作で整列する良雄を俺は見逃さなかった。ここで笑っちゃ悪いと思い、心の中にぐつとしまいこんで笑いを堪えていた。誠はドンマイといいながら笑ってしまい、部長に怒られていたが。

ミーティングが終わると、今日はタイム計測を行うと部長の思いつきでスタートした。100m走。15秒以上かかったやつはバツとして校庭十周が命じられるのでみんな真剣だ。

俺の自己ベストタイムは13秒2、誠は12秒4。普通に走れば問題ないのだが、ちょっと気を抜いて手加減すると致命傷にもなりかねない。出遅れると1秒や2秒なんてすぐなのだ。

さっきの副部長の睨みでさらにがちがちになっている良雄に俺は話

しかけた。

「どうしたんだよ、良雄。浮かない顔して」

良雄はブルーな気分を排してぼそぼそと俺に返答した。

「ぼ、僕、やっぱり陸上部には入らない。無理だよ、僕には・・・」
深い沈黙が流れた。困ったもんだなと頭を悩ませて次と言葉が出てこない。今にも良雄は泣き出しそうだった。これ以上陸上部に固執させたらそれもいじめになるんじゃないかと罪悪感がよぎったとき、誠が走り終わって俺たちのもとへ近づいてきた。

「おう慶太、俺は12秒9だったぞ」

「そっか」

「どうしたんだよ、浮かない顔して」

「それがさ、良雄がもう陸上部嫌だって言ってる・・・」

誠はふーんと頷くと良雄の顔を覗き込んで何やら企んでいるような顔で言った。

「お前、いいのか？このまま辞めちゃって。運動会でいいとこ見せられれば菊原も惚れちゃうんじゃないかな。『きゃー、良雄君素敵』なーんてな。運動会まであと3ヶ月。それまで頑張ってみる気はないのか？ま、俺たちも鬼じゃねえんだ。無理に、とは言わねえけどな」

誠は俺にウインクをしてその場を離れていく。さすが誠だ。中学2年生なのにすでに人間が出来ている。人の気持ちを揺れさせるのがうまい。

案の定良雄は俺たちの背中が消えていく前に叫んだ。

「待って。やっぱりやるよ、僕。陸上部で頑張るよ」

俺たちは2、3歩前を進んでから止まると後ろを振り返り満面の笑みを良雄に返していた。

4月もあつという間に半ばを過ぎ、桜は枯れ、周りはゴールデンウィークの話題で持ちきりの頃、俺たちは別の話題で盛り上がった。

「ねえねえ今度の社会見学、どこ行くのかな？」

「何でも今年は去年までとは違う場所にしてみたいだぜ。でも今日まで発表しないなんて先生もケチだよな、ほかの学年ではとっくに発表になってるのにさ」

夏希と大の発言に祐一が乗っかる。

「まーいいじゃん、どこでも。どうせいつとも散々歩かされて疲れて帰ってくるだけなんだしさ。しかも感想文書かされるんだよ。僕はいいいけど、みんなは平気なの？もういつもみたいに手伝ってあげるのはごめんだからね」

「かー、冷めてるね祐一は。そんなんじゃゴールデンウィークにもう誘ってあげないぜ」

「ちょ、ちよつとそれとこれとは話が別だろ」

祐一が誠の冗談に動揺しているとくすくすと良雄が笑い出した。

俺はその様子を見て嬉しくなって尋ねた。

「どうした、面白いか？」

「あ、うん。とつても」

良雄のすがすがしく眩しい笑顔に俺たちはわけもなく腹を抱えて笑った。こんなに笑ったのは久しぶりだった。

いつからだろう、おかしくても笑えなくなったのは。昔は何に対してもおかしくて笑えたはずなのに。

子どもから大人に変わろうとすることは何かを捨てることじゃない。どこかのロックバンドがそう歌っていた。子ども心を捨てるんじゃない、生かして成長していきたい。このとき俺はそんなことを考えながらただひたすら笑い転げていた。

「今年の社会見学は国会議事堂に決まりました。ゴールデンウィーク明けの6日なので、くれぐれもゴールデンウィークにはしゃぎすぎて寝坊しないように。特に桂木、お前は去年も遅刻したんだから気をつけるんだぞ」

「は、はい」

俺は先生の一喝に驚いて思わず席を立ち上がると、机の角に足をぶつけて電流が走った。それを見て傍観者のクラスメイトはゲラゲラと大声で笑い、それがとても腹立たしく恥ずかしかった。

「ちくちよー、梅宮のやつ。俺だけ名指しで叱りやがって。ほかにも遅刻したやつはいたのによー」

「そりゃそうよ。だって慶太、去年のこどもの日に帰りの電車で遅えて秋田まで行っちゃってたじゃない。携帯持ってないから、私たち本気で探したんだからね」

「そうそう、こいつ2時間も遅れたと思ったら吞気にきりたんぽお土産だって買ってきてな。お前一人だけ何修学旅行行ってきてんだよって。ありゃ今思い出しただけでも笑えるぜ、ハハ」

愛美と誠につられてみんなが笑う。良雄まで笑っているのが無性に腹が立った。

「あー、この」

「な、なんだよ八つ当たりする気か。相変わらず都合が悪くなる」と暴れんのな。

そういうところ昔から変わんねえな」

「うっ・・・」

俺は何も言い返せずにただ黙って固まっているしかなかった。何だか惨めだ。惨め過ぎる。目立ちたがり屋でいつも場の中心にいた俺には厳しい仕打ちだった。

「でもさあ、国会議事堂って微妙だよな。なんかこう、燃えないって言うかさ」

大は暗い雰囲気壊すように話題を変えて切り返す。それに寄りか

かるように夏希がしゃべりだす。

「だよね。わざわざ遠くまで行って勉強じゃあ息詰まりそう」

「僕はいいと思うけどな。面白そうじゃん、意味もなく山登りとかさせられて疲れるよりはさ」

「そりゃあ祐一は将来政治家になりたいからだろ？俺はごめんだぜ、お堅い金儲け集団の仕事なんか見せられるのはよ」

祐一と誠が言い争っているところへようやく立ち直った俺は首を突っ込んだ。

「もうその話は終わりにしようぜ。今はとにかくゴールデンウィークの予定だろ。なあ良雄、お前どっか行きたいところあるか？」

話の輪から置いてけぼりになっていた良雄に話題を振った。案の定、動揺してあたふたしている。

いい加減もう慣れて欲しいものだが、いじめがトラウマとなっていた彼にはそう簡単に普通にすることはできないらしい。少しずつ心を開いてきてはいるが、まだまだだ。

良雄の左肩にポンと手を置いて落ち着かせると、良雄は生唾をぐくりと飲み込んで答えた。

「・・・・・鎌倉」

五月三日、ゴールデンウィーク初日の朝。品川駅で待ち合わせた俺たち7人は9時半に集合ということになっていた。こういうことは全て誠と愛美が取り仕切る。

俺はただでさえ朝弱いのに良雄のお守りまで頼まれたもんだから当然のように遅刻した。走って駆けつけた2人の姿を見て愛美が叫ぶ。

「遅いよ、2人とも。もう電車5本も出ちゃったよ」

「悪い、良雄がぐずぐずいつまでも行くとか行かねえとか言うからよ」

「ち、違うよ。慶太君がなかなか起きないから」

「お、いっちょ前に口ごたえするようになったか」

「ちよっと、いいから早くしなさい」

「はい」

愛美の喝に2人して声をそろえて返事をする、お互いの顔を見合わせて笑っていた。良雄のこんな笑顔を見るのは初めてだった。やっぱり連れてきて正解だ。

こいつはきつといいやつなんだろう。俺たちの言うことに反発もせず少しずつ優しさを見せてくる。それを一瞬で見抜いたからこそ俺はこいつと友達になりたいと直感で思ったのかもしれない。何だかそんな気がして心が温かった。

「ねえ慶太、鎌倉って行ったことある？」

「いや、ないな。そう言えば俺、親戚ん家以外でほとんど東京の外に行ったことねえや」

電車に乗り込んで早々愛美が俺に吹きかけてきたところへ隣で聞いていた誠がウォークマンを外して輪の中に入ってくる。

「なんだよそれ、小学生じゃあるまいし」

「い、いいだろ。誠は行ったことあるのかよ？」

「いや、俺もないよ。大体俺、日本史嫌いだしな」

「ほれ見ろ、行ったことねえんじゃねえか」

愛美と誠と電車内でそんな会話を交わしていると、ポツキをぼりぼりとマナー違反もお構いなしに食べていた大が口を挟んだ。

「あれだろ、大仏がいるって言う。金ピカでキレイなんだよな、あそこの大仏」

「大、それは別の大仏だよ。鎌倉の大仏は金ピカじゃなくって緑っというか白っていうか・・・、とにかく石の色してんだよ」

「へー、そうだったっけ？さすが祐一は物知りだな。勉強に関しては敵わないや」

みんなが引いてるのを感じているのかいないのか祐一は謙遜の態度を取り、鼻を人差し指でこすって照れを隠した。

「ところでさ、あとどれくらいで着くんだよ？」

同じ景色ばかりが続く窓の外を見ながら俺は祐一に尋ねた。

「んー、あと二時間、いや一時間半ってところかな。僕も久しぶりだから自信ないけど。」

大船に着いたら起こすから寝てていいよ」

「お、サンキュー」

まだ乗ってから十分と経たないのに飽きてしまった俺や大や誠は興奮して眠れなかった分を取り戻すように一瞬にして瞼を閉じてうとうと夢の世界に入りこんでしまった。

「起きて、慶太。着いたぞ」

「んっ・・・、その声は・・・」

目を開けるといつものように怒鳴り声を上げてしかめっ面をしている愛美の顔が飛び込んできた。

「もう、慶太はいつも寝起きが悪いんだから」

「何だ、もう着いたのか？」

「あとちよっとってとこだよ。今大船だから2駅」

「へー、もうすぐじゃん」

祐一の言葉を聞いてわくわくしてきた俺が辺りを見渡すと妙な違和感を覚えた。

「あれ、そういえばほかのみんなは？」

「トイレだよ。慶太が全然起きないから先に済ましておくって」

「ふーん」

俺たちがベンチに落ち着いてくつろいでいると、数分経って大と夏希と誠が戻ってきた。

「よう。やっとお目覚めか」

「・・・何だよ誠、その言い方なんかトゲがあんぞ」

「ごめんごめん、そういうつもりじゃねえよ」

「わかってるって、冗談だよ。・・・ん、良雄は？」

「あ、ああ。あいつはクソしてんよ。そのうちくんじゃねえの？」

「しょうがねえやつだな。俺もションベンしてえし、見てくるよ」

「ああ、早くしろって言ってきてくれよ」

俺は「ああ」とだけ返事して改札口付近にある公衆便所へと階段を駆け下りていった。

「おい、良雄。みんな待ってんだから早くしろよ」

ドンドンドンドンドン。俺は素早く用を足すと1つだけ閉まっている良雄が入っていると思うしきドアを何度も強く叩いた。

すると中からしくしくと泣き声が聞こえてきた。俺はドアを叩くのをやめて良雄に向かって語りかける。

「おい、どうしたんだよ。緊張して下痢でもしちゃったのか？学校じゃねえんだからよ、そんな硬くなることねえじゃん。早く済ませてみんなのそこ戻ろうぜ。これからが楽しいんだからさ、な？」

返事はなかった。泣き声だけが鳴り響く。良雄は嗚咽を伴いながらも沈黙を保っていた。俺はもう一度怒鳴り声を上げた。

「おい、いい加減にしろよ。もうあと3数えるまでに出て来ねえと置いてくぞ。・1・2・3・さ・」

「ま、待って慶太君」

俺が3と半分言いかけてようやく良雄の声が姿を現した。今まで泣いていたからなのか、かすれ気味の声だったがはっきりと俺の名前を呼ぶのが耳に入った。

「僕、僕は・・・」

「どうしたんだよ、はっきり言えよ。言いたいことがあんならよ。男だろ？」

「ご、ごめん」

「謝んなよ。俺が悪いことしたみてえだろ」

良雄はもう一度ごめんといいかけて口をつぐんだ。数秒の沈黙の後、声の調子を整えて少しずつ言葉を続ける。

「ねえ慶太君、僕本当にみんなと一緒にいいのかな？迷惑じゃない？」

「・・・何だよ、いきなり。誰がそんなこと言ったんだよ」

「だって僕はいじめられっ子で何のとりえもないし人と話すのも苦

手だし……。僕と一緒にいてもつまらないでしょ？」

俺は良雄の悲痛な本音を聞いて一瞬立ち止まった。ずっと思ってきたこと。良雄が望んだわけじゃない。俺が勝手に仲間に入れたことが果たしてよかったのだろうか。ずっと猜疑心に苛まれてきた。その答えはどこまで行っても見つからない。

ベタな青春ドラマの主人公ならここで一発喝を入れるところだろうが、俺に果たしてできるだろうか。いや、やるしかない。そう自分に言い聞かせて声を張った。

「バカヤロー、そんなこと考えてたのかよ。お前と俺たちはもう友達だろ？少なくとも俺はそう思っている。お前は違うのかよ？違うつてんならもうここから出てくん。そんなかえしもう口も利いてやらねえからな」

声が震えていた。感情を込めているように見えて棒読みだった。取ってつけたような台詞。だけど動揺していて他の言葉が思いつかなかった。ちゃんと伝わっただろうか？祈るほかなかった。俺たちの心に帰ってきてくれることを。良雄の泣き声が聞こえなくなった。しばしの沈黙が走る。

背中を向けてトイレの入り口を抜けようとするとき、バタンとドアの開く音が耳を走り抜けた。

「待って、慶太君」

俺は良雄の声の方向に向かって首だけ向きを変えた。

「慶太君、ご……じゃなくて、ありがとう。僕、慶太君にそう言ってもらえてうれしいよ。本当に……僕、慶太君たちの友達でいていいんだよね？」

「ああ、あったりまえだろ」

良雄は俺に飛びっきりの笑顔をぶつけて抱きついた。俺はそんな趣味ないんだが、まあたまにはこういうのもいいだろう。何だか俺自身も救われたような気がして心が揺れ動いたのが肌で感じられていたんだ。この瞬間を待っていたかのように嬉し涙が自然と浮かんでいた。

トイレから戻ってくるとみんなはベンチから立ち上がって俺たちに手を振った。

「おお、遅かったな。てっきり迷子にでもなったのかと思ったぜ」

「何だよ、誠。最近お前、口悪くなったぞ」

「悪い悪い、ついお前見てるとからかってみたくなっちゃうんだよ。で、腹の調子はよくなったのか？」

「あ、ああ。何か朝腐ったパン食べてきたみてえでさ、そりゃあもうすごい量だったぜ。」

な、良雄？

「あ、うん」

良雄は顔を真っ赤にしながら空返事をした。本当は下痢なんてしていなかったのだが、良雄との友情で本当のことを言わない約束をしたのでこういう作り話になったのだ。夏希に変なやつと思われるから嫌だと駄々をこねたが、最後には良雄もしぶしぶ妥協してくれた。

「大丈夫？」

「うん」

何だか夏希に心配されて嬉しそうにしているのがちょっと腹が立ったが、夏希が良雄に対して嫌悪感を持ってくれなくてよかったと安心した。

「わあーきれい」

夏希が鎌倉について第一声に発した言葉に対して俺はぼそりと呟いた。

「そっかあ？寺ばかりだぜ」

「まあ慶太には風情がないからしょうがないかもね」

「ああ？全く誠といい祐一といい最近ちょっと調子に乗りすぎじゃねえか」

「ちよ、ちよっと遊びに来てまでケンカしないでよ。せっかくのゴ

ールデンウィークが台無しでしょ」

「わーった、わーったよ。言うとおりにすればいいんでしょ、愛美お嬢様」

「全く、素直じゃないんだから」

愛美が俺に聞こえないように嘆息を漏らすと、珍しく横にいた良雄が声を上げた。

「わぁ、懐かしいなあ」

「え、良雄って鎌倉来たことあんのか？あ、もしかしてうちの学校に来る前に住んでたんだろ。違うか？」

誠は冷静さを失いながら良雄の顔に注目した。

「うーん、ちょっと違うかな。僕が3年前に住んでたところ。正確に言うと4回前に住んでたところかな」

「よ、4回前？お前、そんなに引越してたのかよ？」

「うん。うちのお父さんの仕事、転勤が多いから。ここに来る前に8回引越したかな」

「は、8回！？」

俺たちは良雄の言葉を聞いて絶句した。ただのいじめられっ子だと思っていた良雄にそんな苦労があったなんて。

8回も引越していたら友達なんて作りようがない。できてもうすぐになんて思っていたのかもしれない。それでも良雄は俺たちを受け入れてくれた。そのことが嬉しくて、俺たちは良雄に対してにっこりと笑顔を見せた。

今まで弱いやつだと思っていたけど、この言葉で本当は強いんだということを知った。俺たちには真似できない。ここにいるみんなにも俺と同じように良雄が輝いて見えているに違いなかった。

「それで懐かしくなって鎌倉に来たいって言ったのか」

大はぼつりと口をついて出た言葉を発していた。

「うん。8回の中でもここが2年いて一番思い出深い場所なんだ」
感慨深い思いがした。俺たちの数倍は苦勞している中学生が目の

前にいる。それはすごいことだと思った。俺は気を取り直して良雄に言う。

「なあ良雄、今日はお前が案内してくれよ。この鎌倉を。いいだろ？」

「うん、もちろん」

鶴岡八幡宮、寿福寺、建長寺といった有名どころから長谷寺といった地元人しか知らないようなところまで良雄の先導で駆け足で駆け回った俺たちはくたくたになっていた。お昼ごはんも食べずに2時まで走り回れば中学生の体力が持たないことは当然とも思えた。

大仏のある高德院に着くと、良雄の足がようやく止まった。

「この辺でご飯にしようか」

「お、待ってました」

俺が声を上げると愛美と夏希が大きなりユックサックの中からスカーフにくるまれたお弁当を広げた。

すごくいいにおいがする。中にはウインナーや玉子焼き、ゆで卵にサンドイッチ、おにぎりから揚げといった定番の遠足メニューがぎっしりと敷き詰められている。

「うんめえ」。良雄、お前も食えよ。この弁当、愛美と夏希が自分で作ってきたんだぞ」

「え、菊原さんが？」

「あのー、私も作ったんですけど・・・」

ぼそりと愛美が言ったのを聞いて良雄と俺が笑うとみんなが一斉に大爆笑した。笑いながら俺は愛美に囁いた。

「なあ、良雄のやつこっち来てから生き生きしてんよな。学校のこととは大違いだぜ」

「そうだね。でもそれは慶太が葉山君のことをちゃんと見てあげたおかげだよ。慶太が葉山君のことを変えたんだよ。やっぱりすごいね、慶太は」

「はは、やっぱ俺って天才？」

「ちょっと、調子に乗らない。本当、慶太ってすぐ調子に乗るんだから」

愛美が俺の脇腹を突き飛ばして笑いながらこらえていると、再び話題は良雄に移っていた。

「ねえ葉山君、これからどうするの？」

夏希に迫られると照れながら目線をそらし良雄は言葉を発した。

「とりあえず大仏様を見に行こうよ。せっかくここに来てるんだからさ。みんなで大仏様の中に入って記念撮影しようよ」

「え、大仏様って中に入れるの？」

「僕も初耳だよ。本当に入れるの、良雄」

「何だよ、祐一も夏希も鎌倉来たことあるんじゃないのかよ？」

俺は意外に思っ皮肉まじりにそう尋ねた。

「たしかに来たことあるけど、てっきり外から見るとばかり思ってたんだ」

「私も。親と来たときは一言も教えてくれなかったから」

さすがの秀才コンビにもわからない秘密。それだけで俺たちは好奇心をそそられた。良雄がいつも以上に大きく見えた。

「行ってみればわかるよ。まだ時間はあるんだし、ゆっくりお弁当食べてから案内するよ」

「すっげー。大仏の中ってこんなふうになってたんだな」

「本当。ねえ葉山君、大仏様の中に入れるのってここだけなの？」

大と夏希が貴重な初体験に興奮して良雄に尋ねた。良雄は昔を懐かしむように周りを見渡すと誇らしげに言った。

「うん、多分ここだけだよ。僕もそんなに詳しくはないんだけど、少なくとも奈良の大仏様の中には入れないよ」

「……でもさ、手抜きだよな。中はこんなにすかすかなんてさ」

「ちょ、ちょっと慶太」

俺は思わず疑問に思っ感じたことをそのまま口にしていた。愛

美の制止に笑って誤魔化そうとしている俺を見て良雄は笑いながら言う。

「僕も最初見たときはそう思った」

その言葉にみんなの視線は良雄に集まり、沈黙が走った。俺は場の雰囲気明るくするために苦笑いと言う。

「だろだろ？ やっぱ誰だって思うよな、こりゃ手抜きだよ絶対」

余計泥沼にはまったみたいだ。どんどん暗い表情がみんなの顔から浮かび上がってくる。何とか言えと目で合図しても無駄みたいだ。良雄が助け舟になるように言葉を続ける。

「だけどね慶太君、この大仏様は今まで何度も台風や津波なんかで壊されているんだよ。」

だから仕方ないんじゃないかな」

「あ、その話なら僕も聞いたことあるよ。最初出来たときは木造だったんだよね？」

「そう。よく知ってるね、さすが祐一君」

「へへ・・・」

頭の弱い俺には何が何だかわからなかった。まるで別世界に飛ばされたような話だ。傍にいた愛美に囁く。

「なあ、何だかあの2人、似てきたな。元々似てんのかな？」

「うん。同じ元いじめられっ子同士、気持ちがわかるんじゃないかな？ 私にはちんぷんかんぷんだけど」

「だよなー、ハハハハハハ」

俺と愛美は顔をつき合わせてばれないように小さく笑った。

「ねえそういえば記念撮影するんじゃないかった？」

「あ、そういえば。夏希、カメラ持ってきたか？」

「うん」

そう言って夏希は観光客を見渡した。その中の一人の中年夫婦に話しかける。

「あのー、シャッター押してもらえますか？」

カシャッ。これが俺たち7人で撮った初めての写真。良雄が加わ

って初めての記念。心に画像を焼き付けて過ぎていくときをただひたすら怖がらずに前に進んでいく。中学生に未来への恐れなんてない。そこには希望と期待しか見えちゃいない。それが何かを追い求めて止まった時間は今ゆっくりと動き出していたんだ。

「もうこんな時間か」

誠がふと公園に備え付けられた時計に目をやると、時計の針は午後の6時半を指していた。

「そろそろ帰ろうぜ。早く帰んねえと怒られるからな」

「そうだね。あれ、葉山君どうしたの？」

愛美が良雄の名前を呼ぶので俺たちも目をやると、良雄はただ一人立ち止まり気まずそうな表情でいる。良雄は笑ってこう答えた。

「ごめん、みんな。僕、これから友達のところ泊まらなきゃいけないから、先帰ってよ」

「・・・そっか。それなら早く言えよ。それとも俺たちが行っちゃダメとか言うとも思ったのか？」

「ううん、ありがと慶太君。悪いけどゴールデンウィーク中はこっちにいることになると思う。僕、明日と明後日はみんなといられないくなるんだ」

俺は躊躇しようとする良雄の背中を叩いて言った。

「なーに言ってるんだよ。大事な友達なんだろう？早く行ってやれよ。3年振りに会うんだ、話すこともいっぱいあるだろうしな」

「ありがとう。それじゃ僕行くね。社会見学の日絶対行くから」

「ああ、また学校でな」

良雄は後ろ手に公園をあとに走り去っていった。俺たちはただ良雄の背中を見送り感慨深い思いにふけていた。

「・・・変わったね、慶太も」

「は？何だよいきなり」

俺は愛美の言葉に驚いて体をびくっと反応させた。

「あんなくさいセリフ、慶太の口から出るなんて思わなかった。ド

ラマみたいだったね」

「何だよ、変わったとかくさいとか。バカにしてんのか？」

たしかに今の台詞は自然と湧き出てきたもので、トイレでしゃべったそれとは別物だった。本当に愛美には俺の心は何でも見透かされてしまう。それだけにお互いの信頼関係は厚かった。愛美は首を横に振って笑顔で俺の目を見つめた。

「かつこよかったよ、今の慶太」

俺は愛美の言葉に凍りついた。何だか嬉し恥ずかしい気分で不気味に思えた。ほめられることが苦手な俺には毒だ。

この沈黙を解放するように誠が仕切る。

「じゃ帰りますか、俺たちも」

「たくつ、何が遅刻したら入っちゃ行けねえだ。去年はOKだったじゃねえか」

「しょうがねえじゃん、どうせ見たって暇なだけじゃねえか。こうして俺たちも付き合ってやってんだから感謝しろよ」

「祐一と良雄は裏切って入っちゃまったけどな」

「ひがまないひがまない」

「誰がひがむかよ、くそつたれ」

五月六日。社会見学だというのに国会議事堂の外で人間観察している俺はゴキゲン斜めだ。警備員が見回りに来るたびギラギラさせた目で俺たちを睨んでくるのが最高に怖い。生徒が捕まったらどうするんだ、コンチクショウ。

元はと言えば昨日のこどもの日に千葉まで遊びに行ったのが運のつきだった。ディズニールランドから帰る運賃がなくて俺一人だけヒッチハイクで帰る羽目になったのだ。

俺は猿岩石か。今どきヒッチハイクで移動する中学生がどこにいるというのだ。運良く3台だけは車を止めてくれたものの数十キロは自力で歩いて学校まで辿り着いた。おかげで足はパンパン、遅刻で社会見学は本当に見学となってしまう始末だ。元々国会見学なんか

に興味はなかったとはいえ、のけ者にされた屈辱は忘れようと思っても忘れられるものではない。

ジュースを買って戻ってきた夏希が汗を滴らせながらこちらに向かってきた。

「おまたせー」

「おー、待ってたぜ。やっぱ夏希は最高！」

「まったく調子いいんだから」

愛美がぼそりと本音をこぼすと、コーラを飲みながら俺は声を出した。

「それにしてもつまんねえな。やっぱ休めばよかったかな、足も痛えしよ」

「まあそう言うなよ。せっかく祐一が俺たちのためについてみんなの分のゲームボーイアドバンスとPSP持って来てくれたんだからよ」
誠は手に持ったゲームを前に出しながら俺に言った。

「まあな。自分たちだけ楽しんできちゃ悪いと思ったんだろ。・・・
・そうだ大、お前なんか面白い話ないのか？」

俺はにこにこ笑顔絶やさない大に向かって尋ねた。すると大はなにやらごそごそとリュックの中を掻き回して中から本を取り出した。

「見ろよ、今回のはずげえぜ。巨乳に女子高生、いいものぞろい」

俺と誠のおーっという歓声とともに夏希のきゃーという悲鳴が鳴り響いた。すかさず大がページをめくろうとすると、上から誰かの手が伸びた。俺は思わず上を向いた。

「な、何すんだよ愛美」

「こんなもの、学校に持ってきちゃダメだよ。学級委員としてこれは私が預かっておきます」

「お前、人の楽しみを。返せこの、胸揉むぞ」

俺の脅しにも動じず愛美は鼻で笑って答えた。

「できるもんならやってみなさい。足、痛いんでしょ？」

「くっそー。誠、大、敵は頼んだ」

「どうしたんだよ、そのこぶ」

「ちよっとね」

俺と誠と大の頭にはまるでマンガみたいに赤く膨らんだたんこぶが2つずつ仲良く並んでいた。祐一の声がこぶに響いて痛かった。それを無視して夏希が良雄に寄っていく。

「どうだった、葉山君？」

「とっても面白かったよ。僕らの知らない世界がまだこんなにあるんだなあって感心した」

「で、総理大臣には会えたか？」

俺は皮肉たっぷりに祐一に投げかけた。祐一も同じ態度で切り返す。「会えるわけないだろ？国会の最中なんて見れるわけないし、あんまり奥までは入れないんだから」

「そうなのか？俺はてつきり国会の風景を見せてくれるんだと思ってたよ」

大が話に割り込んで祐一に声をかける。

「テレビのモニターでは映ってたけど、一般の人は会期中中に入っちゃいけないんだって」

良雄が答えるとみんな感心してしばらく呆気にとられていた。

「なあ良雄、もう帰るだけだよな？」

「うん、多分そうだと思うけど・・・」

「だったらさ、ここで写真撮ろうぜ。国会のお偉いさんの前でさ」俺の呼びかけにみんな同じことを考えていたのか、首を縦に振って自分のカメラを手を持った。

カシャッ。全部で7枚撮られた写真をいつか思い出すときが来るのだろうか。何も参加しなかった社会見学。ただ7人が一緒にいたという記憶だけが残る虚しさ。

十年後、二十年後、俺たちはみんなのことを覚えているだろうか？再び笑顔で出会えているだろうか？

いつかまた共に成長した友を懐かしみ振り返るときが来る。そんな

とき俺たちはいつまでもありがとうという気持ちで大事にしたい。
そのため、今、出来ることをみんなと一緒にやっているんだ。
時間を忘れ駆けずり回ったこのときを忘れないようにしよう。俺た
ちは写真を撮りながらみなひとつになり同じことを考えていた。

5月が過ぎ、梅雨の季節がやってくる。外はアジサイの上に雨を落とし、窓ガラスが曇りガラスへと変わる。花粉が飛んでいた木々は緑に色を変え、ナメクジやカタツムリが顔を出す。

あと2週間で運動会。うちの学校では受験を控える3年生のことを考えて6月に運動会を実施するのだ。もうそういう時期にさしかかろうとしていた。

「良雄のやつ、すごいんだぜ。この間なんか、100m12秒1出してさ。もう誰もついてけねって感じなんだよ。な、慶太？」

「そうそう、誠の言う通り。良雄にこんな才能があったなんて知らなかったよ」

俺は良雄の照れる肩を叩いて言った。良雄は頭を掻きながら言う。

「僕なんか、全然すごくないよ。速くなったのはいじめられてたときに逃げ回ってたからなんだし」

「・・・なあに弱気になってんだよ。もういじめられてたときのお前じゃないんだろ？ だったら忘れちまえよ、嫌なことなんてさ」

俺が良雄の背中をバシバシ叩きながら檄を飛ばすと、自信なさげな良雄の顔からどことなく迷いが消えたような思いがした。絵の才能を見せていたあのときと同じくらい輝いて見えたのだ。「頑張ってね」という夏希の声に反応して顔を赤らめているのが印象的だったのである。

この時期、運動会に備えて体育の時間は全て運動会の練習に当てられる。

100m走にリレーに組体操……。それに加えて入退場行進の練習。

誰が考えたのかは知らないが、なぜ運動会には整列がつきものなのだろう。競技の練習よりも誰がどこに並ぶか、どう動くかが重視される。行進で一人だけ足がそろっていないようなもんなら全員がそ

ろうまで繰り返しやり直しを強要される。なぜか競技の結果よりも見栄えが優先されるのである。

それに加えて最近では全国に順位をつけないようにしようとする動きまで始まっている。何でも競争心を煽らないようにするためだそう。そんなに競争心を煽らないことが必要なのだろうか。そんなに悪いことなのだろうか。いわゆる体育会系である俺には理解しがたいことだった。

「うそー夏希、桜木君に告られたの？」

「・・・うん。でも断った」

「えっ、何で？桜木君ってスポーツ万能だし、勉強もできるしかっこいいじゃん」

夏希と愛美が休み時間の間、椅子を寄せ合って大きな声でおしゃべりをしている。もちろん大きな声を出しているのは愛美の方だ。あまりに気になったので俺は2人の机に近づいて顔をつき合わせた。

「おい、桜木に告られたってどういう話だよ？」

「わっ」

愛美はビックリして椅子からズレ落ちた。膝を抱えて覗き込む俺の顔を見る。

「何よ慶太、ビックリするじゃない」

「わりいわりい。何かいつもは俺たちのとこに来るのに今日は珍しなあって思ってたさ」

「私たちだって女同士になりたいときだってあるんだから」

「だな、悪い」

俺は軽くお辞儀して「で？」と疑問を再度ぶつけた。

「夏希が桜木君に告られたんだって。夏希は断ったらしいんだけど」

「ふーん」
愛美は俺のそっけない態度に腹を立てたのか目くじらを立てて言う。

「ふーんって何よ。あんたから聞いてきたんでしょ？」

「わりいわりい、怒った？」

ぽんぽんと肩を叩いてその場を離れようとする俺に愛美は皮肉たつぷりに言葉を返してきた。

「そうよね、あんたには夏希が誰と付き合おうと関係ないことだもんね」

俺はその言葉にぴたっと立ち止まり後ろの愛美を振り返って一呼吸置いて言葉を吐いた。

「そんなことねえよ。少なくとも俺のダチには大いに関係することなんだなー、これが」

愛美の視線は良雄に飛んだ。静かな戦いが始まるかのように重い空気がそこには走っていた。当事者である良雄と夏希が気まずい様子でお互い目をそらしていることに俺と愛美は気付いていなかったのだ。

運動会当日。快晴の雲ひとつない青空は梅雨ということを忘れさせてくれるくらいすがすがしかった。運動会実施を告げる花火がピストルの銃声のように鳴り響く。空を気持ちよさそうに飛んでいる小鳥が音に反応して羽をばたつかせながら旋回していく。周りの住民にはこんな朝っぱらから叩き起こされていい迷惑だろうが、当事者である俺たち中学生にとっては死活問題だ。

雨が降って中止になって欲しいと願う文科系や、逆に張り切ってかっこいいところを見せようとする俺みたいな体育会系には特に花火の煙が見えるかどうかかったるい勉強をするかどうかという意味でも重要になってくるのである。

世の運動会に出る子どもを持つ母親もこの日はかりは大忙しだ。途中で貧血になってはいけないいつもよりうんとボリュームのあるおかずを弁当箱ぎっしりに詰め込んでいく。唐揚げ、肉だんご、いなり寿司、特大おにぎり、サンドイッチ、ゆで卵、スパゲッティ、ハンバーグ……。色とりどりのおかずが並んだメニューを考えるのに四苦八苦しているのである。

朝俺が体操着姿で登校すると、教室での空気は完全に二極化してい

た。すなわち、運動会が好き派と嫌い派である。体育会系の俺たちのグループ率いる好き派は盛り上がり、運動音痴やめんどくさがりや率いる嫌い派は朝からどんよりとした暗い雰囲気包まれている。何だか嫌い派には近寄りがたい感じた。

「よう」

誠が教室の開いたドアから入ってきた俺に気付いて手を垂直に掲げて挨拶をした。即座におはようと声を大にして笑顔で返事を返すと、愛美に夏希に祐一に大に良雄も俺の校庭に出して椅子のない机の周りに集まってきた。そこへ良雄が第一声を投げかけた。

「今日は頑張ろうね、慶太君」

「あ、ああ。頑張ろう」

俺のよそよそしい態度に気付いたのか大が言う。

「どうしたんだよ、慶太」

「え、何が？」

「何がって何か変じゃねえか、お前がそんなにびびってんのなんてよ」

「・・・いや、別に。ただ珍しく良雄の方から声かけてきたから驚いただけだよ」

「ならいいけどさ」

俺の表情には間違いなく暗い不安が映し出されていたことだろう。自分でも何が何だかわからなかった。ただ良雄に話しかけられた瞬間、何かを感じたのだ。何か悪い予感。今までこんなことはなかった。嫌な予感がする。胸騒ぎがした。何かこの運動会の最中に起こるんじゃないかという不安が俺の脳裏を掻き立てていたのだ。杞憂であって欲しいと願いながら。

「全校生徒の皆さん、中庭に集合してください」

大きな運動会開幕の花火とともに校内放送がスピーカーを通して流れた。このあたりから運動会肯定派も否定派も活気付き、ざわざわと外に向かって廊下を駆け下りる足音が激しくなってくる。肯定派の持つわくわくと否定派の持つしぶしぶといった違いは大きかった

が。

「おい、ぼーっとしてねえで俺たちも早く行こうぜ」

「・・・あ、悪い。行こう」

珍しく考え事をしてしまった。一番の親友の誠には感づかれたらうか？誠は何も言わず俺の隣をキープしていつものように何気ない会話を投げかけていた。

中庭に集まると、全校生徒が早速行進のための整列を余儀なくされ、だらだらと仕方なさそうに言われたままに動く。体育会系で運動会が大好きなやつでも大抵は行進と開閉会式だけは嫌いだ。大体行進すること自体に何の意味があるというのだろうか。ましてやキレイに足並みそろえなければならぬなんて。俺たちは軍隊じゃないんだぞ、と言いたい。

そんな行進も形だけ。何事もなく平和に体育教師の大きな怒鳴り声とともに校庭のど真ん中で足踏みをしたと思ったら「止まれ」の声で前を向いて止まる。そこから長い校長の話の後、選手宣誓。どこの中学校でも同じなのだろうが、団長が旗を持って一箇所に集まり正々堂々だの精一杯だのスポーツマンシップにのっとるだのと声が枯れるんじゃないかというくらい大きな声で誓いの言葉を述べる。それが終わると国旗掲揚。吹奏楽部が演奏する君が代に乘せて少しずつ柱に吊るされた旗が上へ上へと上がっていく。

そしてようやく俺たちは長い長い開会式から解放された。

「あー、長かったね。私もうくたつた」

「全く、開会式で疲れて競技できなくなったらどうするつもりなんだよな」

「ホントホント、たまには慶太もいいこと言うね」

「ん？たまにはって何だよ？」

「何でもありますーん」

「何かその言い方が腹立つな」

俺が愛美の顔を睨むと誠たちが急に笑い出した。

「な、何だよ？」

「いや、お前らって本当仲いいなって思ってたよ」

俺と愛美は再び顔をつき合わせて笑いながら言った。

「仲がいい？単なる腐れ縁だよ、こんなやつ。別れられるなら早く別れたいわ」

「それはこっちのセリフだよ。慶太、いつも私の言うことに反発するし、わがままだし」

「何だとー、それはこっちのセリフだ」

「いーだ」

俺と愛美が1対1の会話になるといつもこうだ。どうも愛美の言うこと一つ一つに腹が立つ。自分が悪いとわかっているときでも反発してみたくなる。正義を装った仏頂面の八方美人。俺と話するときしか本性を見せない計算高さ。愛美の顔はそういう顔をしているのだ。

「ぷぷっ」と突然俺たち2人を見て噴き出すように笑い出したのは良雄だった。

「何だよ」

思わず俺と愛美は2人声をそろえて良雄に詰め寄っていた。良雄はビックリしたような様子で俺たちの体を静止させる。

「何だか2人を見てると羨ましいなあって思ってた」

「羨ましい？俺たちが？」

「うん。何だかお似合いのカップルだなんて思ってた」

「カップル？」

俺と愛美はその言葉に過剰に反応して頬を赤らめた。

「ううん、そういう意味じゃないよ。僕が言うカップルって言うのはお互いのことを大切に思っている同士ってこと。親友って言えばいいのかな？僕にはそういうの、今までいなかったから・・・」

はにかんだ表情で言葉を探しながら語る良雄の切実な話に俺たちの口は止まった。良雄が今までできた友達ほんの数ヶ月から数年だけで別れなければいけなかったのだ。親友という深い関係になれる

はずもなかった。鎌倉で久しぶりに再開した友達は唯一の友達といってよかったが、本音をぶつけ合う関係にまではならなかったと言う。愛美も誠も祐一も、普段明るい大でさえも暗い表情を浮かべていた。俺は俺が言わなきゃ誰が言うと言わんばかりに自分に自分で喝を入れて良雄の肩をつかんで言った。

「何言ってるんだよ。少なくとも俺たちは親友だろ？前にも言ったけど、俺はお前のこと親友だと思ってる。みんなもそうだよな？」

誠たちは俺の言葉にはっとしたように笑顔を取り戻し、みんなを見渡す良雄に向かって首を縦に振っていた。俺の顔を見て良雄は穏やかな表情で一言、ありがとうと囁いた。
ピンポンパン。

「これから競技を開始いたしますので、男女2人3脚に参加の2年生は入場門にお集まりください」

俺と良雄はお互いを振り払い、呼び出しの声に敏感に反応した。

「僕行かなきゃ」

「おう、ガンバレよ」

「行こう、葉山君」

「うん」

良雄はペアの夏希に手を握られると、恥ずかしそうに夏希に引きずられながら入場門の方へと小走りに消えていった。

「残念だったね、夏希」

「うん」

「全く、良雄が恥ずかしがって肩組まねえで走るから転ぶんだよ」

「ごめん、菊原さん。傷、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

良雄はこんなときまで照れくさそうに頭を掻きながら顔を赤らめていた。俺が冗談半分に良雄の頭をどついてもへらへらと笑ったままだ。どうも人を好きになるとほかのことはどうでもよくなるらしい。恋は最高の麻薬と化していた。

再び校内アナウンスが流れると、誠と大と祐一が俺の肩を叩いた。

「今度は俺たちの番だぜ。ちゃっちゃとほかのクラスのやつらやつつけてこようぜ」

「ああ」

午前中のプログラムが終わって俺たち1組の得点は251点。5組の中でちょうど真ん中の3番目の順位だった。お昼休みになるとみんな思い思いの方向へ散っていく。一人寂しく陰に隠れてお弁当を広げる者、シートを引くと寝転がっていびきを立てて熟睡している者、親と一緒に無邪気な子どもに戻ってはしゃぐ者、午前中の競技で早くも疲れ果てて湿布を貼り出す者……。その誰もがくつろいでしばしの憩いのときを楽しんでいる。

「で、その先どうなるんだよ？」

「僕の予想だと月が最後には自殺っていう線が有力なんだけど・

・」

「やっぱり祐一は現実的だよな」

「何だよ、悪いかよ」

「そうは言ってねえけどさ、もったこう人類が全滅しちゃうとか別の死神が出てきて月が死神と対決するとか思わないわけ？何か祐一の考えじゃ想像力が掻き立てられないんだよな」

のろけている良雄をよそに俺たち男子は少年ジャンプで人気の漫画の展開予想を始めていた。俺たち中学生男子にとってジャンプは永遠の夢であり、バイブルなのだ。この手の話題が上ると会話は途切れることを知らない。女子2人は良雄を人質に取り、呆れた顔で男子の会話を耳に入れる。

「ちよつと慶太、聞いてる？」

愛美の大きな声に反応して俺は一人、誠たちから外れ首を向ける。

「何だよ愛美、うるせえな」

「怒ることないでしょ」

「わ、悪い」

俺が愛美に対して頭を下げると、愛美の表情は深刻な引き締まった顔に変わった。

「それより大変なの、葉山君が」

「えっ、良雄がどうしたって？」

俺は夏希の腕に抱えられていた良雄の表情を見て異常に気付き、おでこを触った。

「すごい熱じゃねえか」

「でしょ？ 私たちが先生に言った方がいいって言っても聞かなくて良雄はのろけていたのではなかったのだ。うっかり見落としていた。てつきり顔が赤いのは夏希の傍にいたからだと思っていた。でも違ったのだ。好きな子と一緒にいたから赤かったんじゃない、熱があったから赤かったのだ。どうして気付いてやれなかったのだろう、こんなに近くにいたのに。辛そうな良雄の表情を見て俺はとっさに叫んだ。

「愛美、先生を呼んで来い、早く」

愛美がわかったと言って立ち上がった瞬間、良雄は待ってと力なき声を発した。

「僕は・・・大丈夫だから。だから・・・先生には言わないで、お願い」

「何言ってるんだよ？ お前すごい熱じゃねえか」

俺には理解できなかった。どうしてそこまでして運動会にこだわるのだろうかということを。どうして競技に参加したいのかということ。

「僕、みんなと一緒に最後まで参加したいんだ」

「どうしてそこまでこだわるんだよ？ 100m走で1位だった。障害物競走でトップだった。もう十分だろ？ 来年だってあるんだしさ」

「・・・ないんだ、僕には。またいつ転校するかわからない。だからみんなと思い出作りがしたいんだ。お願い、慶太君」

俺はすぐには返事することができなかった。忘れていた、良雄が転校という爆弾を常に抱えていることを。ずっと友達だと思ってい

た。でもそうじゃないんだ。ずっと友達かもしれないし、明日転校するかもわからない。そんなことを気にしながら今まで生きてきたんだ。一つ一つの出来事を大切にしたいという気持ちが痛いほど伝わってきた。

「・・・わかった、先生には言わない。そんなかえし無茶だけはするなよ。無理だとわかったら俺が全力を持って止めるからな」

俺にはこれだけの決心を固めた男を止める勇気などなかった。ただ認めるだけ、それだけのことしかしてやれることができないのだ。良雄は真っ赤な顔でありがとうとにつこり笑っていた。

午後に良雄が参加する競技は2つだけ。それも俺も一緒に出場する競技だ。誠たちにも良雄のことを話し、みんなでサポートしてこうと決めた。良雄も競技が終わったらすぐに休むと約束してくれた。競技に参加していない間、愛美と夏希が良雄の頭を冷やし看病を続けている。

夏希が持っていた体温計で良雄の体温を計ったところ、38・3℃もあった。それでも良雄は音を上げるそぶりは見せず、笑みを浮かべてやせ我慢をしている。良雄はこう見えて意外と頑固だ。今更何を言っても聞かないだろう。全力で止めるとは言ったものの、これでは力づくでなければ無理そうだ。

午後最初の競技、玉入れが終わると俺と誠は良雄の肩を担ぎながら言葉を囁く。

「大丈夫か？そろそろやばいんじゃないか？」

「そうだぜ。無理することねえんだぞ。ここまで参加したんだ、思い出作りももう十分じゃないか」

「ううん。僕なら大丈夫だから最後までやらせてよ」

「お前が大丈夫だって言うんなら止めねえけど、最後組体操だぜ。危険なんじゃないのか？」

「だよな。あんな危なくて辛いのは、普通はサボりてえもんな。いくら運動会が好きでも組体操だけは別もんだし。点数も入んねえから

手抜きでやるやつも多いんだぜ」

そうなのだ。運動会の中で最も派手でインパクトのある競技、組体操には得点がない。まあダンスみたいなもので技術点が素人ではわかりづらいというのがあるのだろう。そのわりには危険度が高く、真剣にやらないと怪我をする。タワーの一番上に乗る生徒が落ちこちて入院したという話も聞いたことがあるくらいだ。そんな責任重大の組体操なんて好き好んでやるものではないのである。その話をしても良雄は首を横に振り息を切らして言葉を発する。

「それでも・・・それでもやりたいんだ、みんなと一緒に」

俺たちはそれ以上何も言えなくなっていた。無言で俺と誠は神妙な面持ちでお互いの顔を見合させていたのである。

残り競技が組体操とリレーのみに絞られた頃、夕日がさんさんと降り注ぎ、俺たち生徒を照らし出していた。梅雨のじめじめとした暑さとは違い、6月だというのに赤く日焼けした空が運動会の終焉を今にも告げようとしている。俺たち2年男子は入場門で今か今かと組体操出陣の合図を待っているのだ。

ピー。

組体操開始の笛が鳴らされた。生徒ひとりひとりが思い思いに所定の場所に散っていく。組体操は一人で行うものから二人組、三人組、四人組、五人組とだんだんと増えていき、最終的にはピラミッドやタワーを十人組で行う。それも笛の音とともに。

最初は首倒立やらV字開脚やらと一人演技が続く。そこから二人組になって笛の合図に合わせて補助つきの倒立、肩車からサボテンと一気に盛り上がりを見せる。組体操のひとつ前にダンスを終了した女子からは黄色い声援が演技を成功するたびに鳴り響く。

三人組の演技は帆掛け舟やら何やらと下になる生徒には相当の負担がかかる。身長の高い良雄は高熱の上に下になる役割で息を荒げながら演技をこなしていた。それに支えられている俺たちも何だか罪の意識を感じていた。

「なあ、やっぱ下の役代わろっか？」

「ううん、いいよ」

「お前、身長のわりには痩せてんだから別に上になってもおかしくないんだぜ？」

「そうだよ、上の方が目立つんだから思い出作りにはもってこいやねえか？」

良雄は垂れ流れていく汗を拭いながら起き上がり笑った。

「ありがとうみんな、僕のわがままを聞いてくれて」

「どうしたんだよ、改まって」

「だけど、・・だけど最後までやらせて。ピラミッドとタワーだけはみんなの言う通り上に立つからさ」

「・・でもピラミッドとタワーって一番上は危ねえんだぞ」

「大丈夫。だって慶太君たちが支えてくれるんでしょ？」

俺と誠の言葉は一瞬にして無と化した。良雄は俺たちを信頼している。俺たちが信じてやらなくて誰が良雄を信じるのだ。良雄の願いを叶えてやりたい。この言葉を聞いてすぐにそういう気持ちが沸いてきたのである。

五人組の扇が終わると、組体操はいよいよクライマックスに移った。鳴り響く笛の音とともに五人から十人へとグループができる。俺、誠、祐一、大はほかのメンバーに良雄のことを伝え、最初は難色を示されたものの全力で良雄を支えてくれることを約束してくれた。

4人、3人、2人、1人と下段から順番に土台を作る者と一番上で立つ者が整列して座り込む。笛の音に合わせて下段の者が立ち上がり最初の土台を作り上げる。俺たちのグループでは大と誠が最下段だ。

続いて俺のほか2人が三段目を形成する。上になればなるほど足や手についた砂が滑って上に乗りにくくなるのだ。おまけに背骨がゴツゴツしていてどこに足を乗せていいのかわからない。下手に乗せると後々滑って崩れ落ちてしまい台無しになる。それだけに真

剣に足場を探さなければならぬのである。

さらに二段目。祐一ともう一人のメンバーは慎重に土台を階段にしながら上へと登っていく。俺たちが待っている四段目と三段目はぐっと痛みをこらえてできるだけ動かないように見守っていないければならない。上が乗ったかどうかは目で判断するのではなく、重さで判断するしかないのだ。いくら運動で鍛えたとは言っても数十キロの中学生を腕と腰の力だけで支えなければならぬのは辛いものだ。三段目の俺でさえこれなのだから一番下の大や誠はもっと辛いのだろう。

そして二段目も乗り、ようやく一番上に立つ良雄の番となった。登りはじめを告げる笛の音が鳴り響く。良雄は朦朧としているであろう頭を横に振って意識を正常に戻すと、少しずつ少しずつ足を土台に駆け登り始めた。

「無理すんなよ」

「怖くなったら言えよ」

「ゆっくりでいいから、ね」

「俺たちに寄りかかっていいからな」

俺たちが見守りながら良雄に声をかけると小さな声で「ありがとう」と返事が聞こえてくる。もう大きな声を出す力が無くなっているのかもしれない。何度も良雄は足を滑らせながらてっぺんを目指していく。

笛の合図から遅れること、一分半。ようやく良雄がてっぺんで四つんばいになったのを実感できた。もう周りは顔を上下左右へと動かす演技の最中だ。俺はみんなに顔の動きは省略して待機しようとして提案した。良雄のガラガラ声がそうしようと珍しく意見を受け入れてくれたのは、それをやる余裕がなかったただけかもしれない。

ピーピーと2回連続で笛が鳴らされた。てっぺんの生徒が立ち上がってポーズを取ることを知らせる合図だ。

「大丈夫か、良雄？」

「うん、何とか・・・」

「よし。ゆっくりでいい、ゆっくりで」

良雄の体から汗がだらだらと滴り落ちているのが背中を通して伝わってくる。たしかにこの日は三十度を超えているんじゃないかっていうくらいの炎天下。それでもこの汗の量は尋常ではなかった。良雄は足をかく揺らしながらも精一杯の力を振り絞って立ち上がる。良雄の体が持ち上がるたびに俺たちの背中にかかる負担は大きくなっていく。

でもそれは苦痛ではなく、むしろ喜びだった。乗りかかった船、ここで諦めるわけには行かないのだ。

何とか親友の願いを叶えてやりたい。俺たち十人の思いはその瞬間、ひとつになった。

ピーピーピーピーッ。

演技が完成したときに鳴らされるリズムカルな笛の音に合わせるように良雄はぴたりと垂直に立ち上がった。上目遣いでかすかに良雄が腕を横に突き出して十字型のポーズを決めているのが見えた。俺たちは口をそろえて「やったー」と叫んでいた。

ピッピッとポーズを解除してしゃがめと合図が鳴る。

「よし、やったな良雄」

「あともう一歩だ、頑張れよ」

「ありが・・・」

良雄が言葉を発したその瞬間、背筋が凍るような思いがした。四十数キロの重圧が背中にしたかった。べつとりまとわりつく大量の汗がやけに冷たかった。俺たちはすぐにピラミッドを崩し、一人の少年を抱きかかえて先生たちの名を叫んでいた。

運動会から十日後。午前中で学校が終わると俺と誠と祐一と大と愛美と夏希は大学病院の一室に足を運んでいた。元気そうな良雄の表情を見て安堵の表情を俺たちは浮かべていた。

「本当に大丈夫なのかよ？」

「全くビククリしたぜ。急に意識がなくなるんだもんな。このまま

死んじゃうんじゃないかって心配したんだぞ」

大の冗談に俺たちは悪いと思いながらも良雄の顔を見ながら堪え切れない笑い声を漏らしていた。そこにはベッドに横たわる良雄の笑顔も一緒にあった。

「みんな、心配かけちゃってごめんね」

「ううん、気にすることないよ。先生も風邪が悪化して肺炎になっちゃっただけだから一ヶ月くらいで退院できるだろうって言ったし」

「あ、ありがとう」

「おや、顔が真っ赤なところを見るとまだ熱があるのかな？どれどれ・・・」

「ち、違うよ」

良雄が慌てて否定するのを見て再び爆笑の渦に巻き込まれた。その隙に愛美が俺と誠と大と祐一にひとつ囁いた。俺たちは無言で頷いて良雄に声をかける。

「あっ良雄、俺たちそろそろ行かなきゃなんねえんだ」

「えっ、もう？」

夏希の笑顔にとろけていた良雄が真顔になって聞き返した。

「あ、心配すんな。夏希は残るって言ってるから」

「えっ？私そんなこと・・・」

愛美は夏希が言いかけた言葉を塞いで小声で「いいから」と静止する。

「ということだからあとはお2人さん仲良くなってよ」

「ごめんね、良雄。僕らもまた来るから」

バタンツ。病室のドアの向こうに俺たち5人は小声で囁く。

「愛美もすごいこと考えるよな。2人きりにしてあげようなんて」

「これくらい当然でしょ？慶太も2人をくっつけようと思うんだったらもっと2人きりの場を作ってあげない」と

「なあ、ホントに2人の会話聞いてちゃダメなの？」

大は不満そうに愛美に懇願して瞳をうるわせながら見つめている。

「ダメ。そんなことしたらムードぶち壊しでしょ？」

「なーんだ、つまんないの。でもいいよなあ、良雄。俺も一回入院しようかな？」

大のポツリと呟いた言葉にはただ苦笑していた。そこには季節外れの冷たい風が立ち込めてでもいるかのように。

「・・・みんな、行っちゃったね」

「ホント、私を置いてくなんてひどいよ」

たった2人しかない病室には気まずい雰囲気が流れ込んでいた。病室は4人部屋なのだが、今はお昼時だからみんな食堂に出て行ってしまっている。この部屋には重症患者がいないからか病院側で用意された食事を取る者は良雄だけなのだ。そのことが余計に虚無感を生んでいるのかもしれない。

鼓動の高鳴りを抑えながら言葉を探す。やっと見つけた言葉を発しようとして口をついて出た言葉。

「あ、あの――」

思わず重なった2人の言葉が顔を紅潮させ次の言葉を発する躊躇を生んだ。せっかく抑えていた鼓動の高鳴りが最高潮を迎えるのが胸に手を当てていなくてもわかるくらい興奮していた。

思考停止になっていた頭をぶんぶんと振り動きを取り戻すと、良雄は言葉を続けた。

「何、菊原さん？」

「ううん、私のことはいいから先に話して」

「・・・いいの？」

「うん」

良雄は夏希の笑顔を見ながら考えていた。何を話そうかと。今でなくては聞けない話、今聞かなければいけない話。いくつも浮かんでは消える思いを錯綜させながら頭の中で闘っている。

「葉山君？」

「うわっ」

良雄は顔を平然と近づけてきた夏希に我を取り戻した。

「ねえ、早く話してよ」

「ご、ごめん。え、えっと……、菊原さんは好きな人いるのかなあって。あ、僕何聞いてんだろ？ごめん、言いたくないんなら言わなくていいから」

何を聞いているんだろう。自分で自分がわからなくなっていた。気が動転してとんでもないことを聞いてしまった。あまりにも直接的過ぎる言葉。本当はこんなこと聞きたいんじゃないのに。いや、本心では聞きたいのかもしれない。でも今聞くべきじゃないことは確かだと思った。何より自分の気持ちが悟られるのではないかと不安を覚えた。

「いるよ」

その言葉を聞いた瞬間、身がよだつような想いが先立った。胸にちくりと痛みが走った。最初から無理だとは思っていた。だけど内心どこか期待していたのかもしれない。だからこんなに胸が痛むのだ。どうしようもなく恋焦がれる想い。そこから先、夏希が何か言葉を続けているように思えたがもはや何を言っているのか解読することは出来ないでいたのである。

夏が終わった。

青すぎる希望と不安に満ちた夏。

初めて良雄を加えて7人で遊んだ夏。

江ノ島で女子の水着姿に赤面してみんなと離れて泳いでいた良雄。

陸上部の大会で俺が4位入賞、誠が準優勝だったのに対し、3位に食い込んだ良雄。

夏希の誕生日なのにどこか遠慮して夏希の様子を窺っている良雄。その全てが新鮮だった。第一印象の頼りなさげで覇気のない姿とは見違えるくらい良雄が日増しに逞しくなっていくのがわかった。だがそれとは逆に夏希とはあの病院での2人きり以来ギクシャクとした感じだ。いや、ギクシャクとしているのは良雄の方だけだったのである。

季節は秋に移り変わり9月の中旬に差し掛かっている。紅葉を今にも始めようとする木々は今も未だ夏の余韻を残していた。衣替えの終わっていない露出の高い制服は暑い夏が終わっていないことを示している。クラス中は文化祭や合唱コンクールの準備で大忙しだ。

「どうした良雄、最近何だか変だよな？」

「えっ、僕は普通だよ」

「いや、たしかにそうだけど・・・、なんていうか、夏希と何かあったのか？」

「えっ？」

良雄は嘘を隠すのが下手なタイプだ。すぐ顔に出る。まるで思考回路が停止したかのように動きが止まってしまった良雄の表情を見て俺は何かあるかと確信した。

「言ってみろよ、俺とお前の仲だろ？」

「う、うん・・・実は――」

俺は良雄から聞かされる病室での2人の会話のVTRでも見るかの

ような言葉一つ一つに耳を傾けた。そこから語られる真実に相槌を打ちながら。

「ふうくん、夏希って好きなやついたんだ。俺、てっきり天然だしそういうこと考えないやつかと思ってた」

「最初から・・・最初からわかってたけど、僕どうしたらいいのか・・・」

うつむいたまま暗い表情を浮かべる良雄を見て俺自身も何て言っただらいのかわからなかった。俺自身恋なんて無縁の生活を送ってきたからだ。ただ根っからの体育会系の俺には努力が裏切るなんてことを信じられなかった。いや、信じたくなかったのだ。

そんなとき聞き耳を立てて俺たちの会話を聞いていたのか誠が間に入ってきた。

「なーに準備サボって2人でこそそしてんだよ。怪しいぞ、お前ら」

「な、何だよ。俺は良雄が困ってるから相談を聞いてあげてたんだよ、悪いか？」

「相談？」

誠は良雄の顔を覗き込むと、喝を入れた。誰よりも大きい声は廊下にまで響き渡り、周りの視線は自然と誠に集まった。

「さっきから聞いてたけどよ、根性が足りねえよ、根性が。もし相手に好きな男がいたとしても奪ってやろうって気はねえのかよ。大体付き合ってもいいねえんだろ？ だったらお前にだってチャンスがあるじゃねえか。もしかしたらお前がその好きなやつかもしれねえし、これから好きなやつになるかもしれねえんだから」

「だな、誠の言うとおりだよ。夏希、桜木のことも相手にしてなかったくらいだから意外と脈ありかもしれねえぞ」

「・・・そうかな、僕なんかが出来るかな？」

「ああ、お前ならできる。俺たちのほうが夏希の性格を知ってるんだ、できる限りバックアップするよ」

「桂木君・・・、笹生君・・・、ありがとう」

良雄の目頭には熱い涙が溜まっていた。それは出会ったばかりの頃流していた涙とは違う優しさに満ち溢れる涙。本当に嬉しいときに流す涙だった。

「悪かったな、怒鳴ったりして」

誠の言葉は良雄の心に突き刺さり、より一層良雄の涙を熱くしていたのである。

九月二十三日、文化祭当日。うちの文化祭は中学校では珍しく一般公開されている。所詮中学の文化祭は高校や大学のパクリだという冷やかな目があるためか、学校の生徒と先生たちだけで内密に模擬店を開催して終わりというパターンが多いのである。

実際公立の中学校では作り物のお金を使っただけの模擬店を開催して利益を全く考えない文化祭もあると聞く。お店で売るものは買ってくるのではなく、元々いらなくなったおもちゃやゲームソフト、マンガ本なんかを出すのだ。いわば、フリーマーケットのようなままごとの延長で大抵の中学生はそれに満足している。

それでも一般公開するのには理由があった。ひとつは私立だから一般公開することでイメージアップを図ろうというもの。もうひとつは一般公開することで自己満足に終始せず客相手がいかに難しいかを知り、早いうちから職業意識を持ってもらおうという心意気だった。

俺たち2年1組の出し物は駄菓子屋。前日までの3週間、俺たちは近くの駄菓子屋を回り奮闘した。お金を持ってリヤカーを押し、走り回っての四苦八苦。東京のど真ん中では当然駄菓子屋の数が足りず、下町まで遠出する羽目になってしまった。

「これで足りるかな？」

「大丈夫なんじゃない？ 足りなければまた男子たちが調達に行ってくれるよ」

「ちょ、ちょっと待て。俺たちはもう無理だぞ。大体調達しに行ったら文化祭終わっちゃうじゃん」

「あ、そっか」

「とにかく全部売ることを考えればいいじゃん。足りなかったら閉店すればいいだけだし」

パパンッ。窓の外から午前十時、文化祭開門を告げる花火が打ち上げられた。

「いらっしやいませ」

ことのほか好調に映る客足。客の手に乗るお札や小銭と俺たち店員の掌が重なり合う。去年経験してわかったことだが、どうやら序盤に客足が好調なのは物珍しさがあるかららしい。それが時間とともに客足が減っていくシステムになっている。特にお昼時は飲食店以外は軒並み苦戦を強いられる。

午後は午後で帰り始める客が出て客足が遠のいていくのである。午後から来るお客は少なく、大抵はお昼までに入場することになる。つまり始まったばかりのこの2時間が勝負なのだ。

「すごい熱いね」

「ああ。ホントよかったよ、俺たち焼きそばやお好み焼きにならないくて。あんなの作ってたら死だよ、死」

残暑厳しい9月の終わりは異常に蒸し暑い。今日の天気予報でも日中は三十度近くまで上がると言っていた。みんなジャージの上を脱ぎ捨ててTシャツ1枚になって店番をしている状態だ。隣でひーひー言っている良雄にも小さな声で話しかける。

「大丈夫か、良雄。またぶっ倒れんなよ、お前見かけによらず体弱いんだからさ」

「大丈夫だよ。運動会ときは朝から熱っぽかったからあんなことになっただけだって」

「それならいいけどよ。それにしてもよく朝から調子悪くて学校来れたよな」

「ハハ・・・僕、負けず嫌いは誰にも負けないつもりだから」

「何だよそれ、自慢になってんのか？」

こう忙しいと他愛もない会話でも嬉しいものだ。忙しさを紛らわせてくれる。笑顔を無理やり作って引きつった口角も少しだけ和らいでくれる気がするのだ。

2時間もお昼を知らせるチャイムが鳴ると客足は一気に遠のいていった。ちょうど店番の交代の時間。俺たちが引き継ぎに来たクラスメイトにバトンタッチしたところだった。柄の悪いアロハシャツを着た二十代前半かと思われる男2人組が教室に入ってきた。

「いらっしやいませ」

夏希と交代を果たした女子が声高らかに社交辞令的な挨拶を入れる。

「何だ、しけたもん置いてんな」

ガゴンッ。男は店員の挨拶を無視して品物棚を蹴り上げた。蹴り上げられた品物棚、つまり机は横になって倒れ、駄菓子も床に散乱する。

「ちょ、ちよっと、お客様やめてください」

「うるせえな」

バコンッ。男は制止に入った女子の頬を思いっきり殴った。突き飛ばされた女子は左の頬を真っ赤にして口が切れたのか少し血を流している。

「おう、悪かったな。おい、もう行こうぜ」

男が立ち去ろうとドアに近づいた瞬間だった。一人の女子が立ち向かって行ったのは。

「待ってください」

夏希は男たちの真後ろにいつの間にか立っていた。俺たちが気付かないうちに。彼女の足はがくがくと震えている。学級委員の愛美ですら足がすくんで動けなかった状況で夏希は動いていたのだ。

「何だよ、俺たちは中坊には興味ねえんだよ。わかったらあっち行きな」

ギロツと睨む男の目はメデューサにでも睨まれたような威圧感を放っていた。凍りつくような目。人を殺しそうな表情に助けたくても俺たちの足もすくんで動けなかった。

「あ、謝ってください」

「ああ？」

「謝ってください、綾に」

夏希の目は本気だった。体は動けなくても目は死んでいない。今にも泣き出しそうな目をしながらも夏希の正義感が男たちを追い詰めているのである。

「謝ってください、だと？ふざけてんのか」

「ふざけてなんかいません。彼女は、綾は何にも悪いことしてないのに傷つけられたんです。お願いですから謝ってください」

「ふざけんじゃねえ」

バシンッ。夏希の右頬にビンタが飛ぶ。掌が振り抜かれた瞬間、夏希は血を噴き出した。それでも彼女は諦めなかった。男のジューパンの裾を両手で掴む。

「お願いだから、謝って」

「しつねえな」

バシンッ。もう一発夏希の顔面めがけてビンタが飛んできたところだった。目の前に一人の男子生徒が立ちはだかったのは。それは紛れもなく俺たちの親友の良雄の姿だった。

「そのくらいにしてもらえませんか。何の抵抗も出来ない女の子の顔に傷をつけるなんて最低のことだと思わないんですか？」

良雄もけして怖くないと言ったら嘘になるようだった。毅然とした態度を取ってはいいるが、顔が強張っている。それでも守らなきゃという一心で体が反応してしまったに違いない。男たちも諦めたのかそれ以上言い返そうとはしなかった。

「わ、悪かったよ。じゃあな」

そう言って立ち去った瞬間、良雄は緊張の糸が切れたようにその場に膝をついて倒れこんでしまった。すぐに俺たちは良雄と夏希の傍に駆け寄った。

「大丈夫か？」

「うん、何とか……。それより菊原さんと佐々木さんは？」

俺と良雄が後ろを振り返り傷つけられた女子たちの方角を向くと、愛美がにこっと笑顔で両腕でマルを作っていた。

「大丈夫、何とかガーゼ貼っておいたから。念のためこれから保健室に行こうと思うんだけど・・・」

「よ、よかった・・・ハハ——」

良雄は肩の力が抜けるように倒れこんだ。

「おい大丈夫かよ？・・・ん、何か匂う——ってこれシヨンベンじゃん」

流れ出る液体に離れた俺と入れ替わるように頬にガーゼを貼り付けた夏希が気絶した良雄の体を抱きしめた。それこそ尿が自分の体に付着することも構わずに。

「ありがとう」

涙を流しながら夏希は強く強く抱きしめた。傷のない方の頬を良雄の頬にこすり合わせて沈黙を保ったままだ守ってくれた恩人にお礼をいう姿は、案外この2人はお似合いなんじゃないかと俺たちに思わせるくらいのインパクトを与えてくれたのだ。

文化祭の一件があった後も夏希と良雄の仲が進展したなんてことはない。良雄はそのとき気絶していて何も覚えていないようだった。面白いので黙っていつもの俺たちの取り決めで良雄はそんなことがあっただなんてこれっぽっちも思っていない。ただ客観的に見れば好きな女の子を助けたんだから相手の気持ち揺れ動くことを想像できなくもない。良雄にそこまで頭が回るかは謎だが。

季節は移り変わり、今は十一月初旬。枯葉も落ちもうすぐ冬が訪れることを季節が告げていた。もうすぐ林間学校が始まる。クラス中はその話題で持ちきりで、このところはホームルームの時間が長い。総合学習の時間も班毎の予定表作成に追われていた。音楽の時間までも林間学校の中で行われる合唱コンクールの練習に明け暮れる毎日だ。

「ウォークラリー、キャンプファイヤー、合唱コンクール、うどん作り……。何か毎年同じメニューじゃ飽きちゃうよな」

「ホントホント。せっかくの泊まりなんだしさ、もっとこうわくわくさせてくれる行事ないのかな」

「そのために最終日の自由行動があるんでしょ？」

「自由行動だったってたった2時間じゃあな」

「ホントだよ。僕だってもっと勉強できるところがよかったのに山奥じゃ疲れるだけだね」

「もう、藤堂君までそんなこと言って……。これじゃ一向に予定表埋まらないじゃん」

愛美がふくれっ面で俺たちの顔を覗くと、ふと視界に話し合いに参加していない2人に目がいった。

「そう言えば夏希と葉山君はどこ行きたい？」

「そうだよな、2人でこそそ話してないでちっとは参加しろよ」
「ごめん」

2人は息ぴったりに声をそろえて頭を下げた。静かな沈黙の鐘が鳴り響くと2人の声はまたしても重なり合った。

「お土産屋さん！」

俺たちは2人が顔をつき合わせて言う姿に笑みが零れた。

「お土産屋さん？ そりゃまた無難な答えだけど・・・」

「ううん。僕、今菊原さんと話してたんだ。昔親と一緒にここに行ったときにすごいお土産さんがあったって」

「すごいお土産屋？」

俺たちは哑然とした。何がすごいというのか興味があった。大きな声を上げたのにもかかわらず良雄は淡々と話を進める。

「うん。そこはね、自分たちの写真をプリントしてキーホルダーにしてくれるんだ。そこに一緒に映った人たちとは一生絆は消えないうっておじさんが言ってた。前に行ったときはお金が足りなくて買えなかったんだけど、次に友達と一緒に来たら絶対買いたいって思ってたんだ」

「・・・友情の証、ってやつか。いいんじゃないかな、そういうのも」

誠がぼそつと呟いた言葉に俺たちも同意の頷きをしていた。

「おし、自由行動はそこに行くことで決まり。でもそれだけじゃ時間余るだろうし、もう少し案を煮詰めようぜ」

「賛成！」

十一月十九日、林間学校当日の朝。冬近しを感じさせる肌寒さと雲ひとつない透き通るような青空から覗かせる太陽の光が眩しい。出発の朝は8時集合といつもの学校生活に比べると早い。それに加えて興奮から寝付けなかった大半の生徒が寝不足のまま欠伸と寝癖を携えて登校してくるのだ。

「おはよう」

「おはよ、慶太。眠そうだね、大丈夫？ 席隣なんだから途中で吐いたりしないだよ」

「わかってるって。愛美の方こそよだれ垂らしたまま寝るんじゃないぞ」

「な、私がいつよだれ垂れして寝てました？」

「何だよ、覚えてねえのか？ 小学校のとき修学旅行のバスですごいパニックだったんだぞ。お前のよだれをみんながションベンだと勘違いしてよ。俺がカバーしてなかったらお前今頃お漏らし女って呼ばれてたんだぜ」

「あれ、そんなことあったっけ？ そう言えばよだれ女ってあだ名になってたときがあった気が・・・」

愛美が自分の頬を手で抑えて赤らめていると、誠も俺たちの存在に気付きこちらに向かって手を振った。

「おーい、朝っぱらから何の話してたんだ？」

「それがさ、こいつが昔ションベ・・・うぐっ・・・」

俺が冗談めかして発した言葉を愛美は脇腹を殴って防いだ。

「昔、何だよ？」

「ううん、何でもない。それよりみんなは？」

「ああ、何かもう並んでるってメールがあったぜ」

「そっか、それじゃ私たちも行こう」

お腹を抱える俺と愛美と誠の3人が中庭に集合すると、すでにクラスの半数以上は待ちくたびれたように地べたに座り込んで友達とおしゃべりを楽しんでいる。その中に俺たちは祐一と大と良雄と夏希の姿を発見した。

「おーい、みんな」

「あ、慶太と誠と愛美だ。遅かったね、何やってたの？」

「ごめーん、慶太朝弱いから」

「何俺のせいにしてんだよ。後で覚えてろよ」

「べーだ」

あっかんべーのポーズを俺に見せ付ける愛美の姿に腹を立て、愛美の髪の毛を引っ張る姿を見てみんなの笑い声が聞こえた。

「本当に仲がいいんだね、2人とも」

「は？良雄、何言ってるんだよ」

「だって言うじゃん。ケンカするほど仲がいいってさ」

「ぷっ。アハハハハハ・・・、良雄も言うようになったじゃねえか」

「あのなあ誠、俺たちはそういう意味でケンカしてるわけじゃ・・・」

「そうよ。なんで私と慶太の仲がいいわけ？」

「そう言ってる場所もそっくりじゃん」

「大まで・・・」

何だか俺も愛美も言い争う気力を失い、穏やかな表情で和解するようにお互いの顔を見ていた。

しばらく話し込んでいると、マイクつきメガホンを通して校長先生の声が鳴り響いた。

「えー、今日はみなさんにとって一年で一番大きな行事である林間学校であります。今日明日の2日間、共にするお友達と仲良く過ごし、これが私たちの中学2年生の最高の思い出であったと胸を張って言えるよう楽しんでください。さて、林間学校というのは――――」

校長の話が延々と続く中、舌打ちをする者や持ってきたゲームで遊ぶ者、林間学校と修学旅行中だけ許される携帯電話を使ってメールの交換をしている者、立ったまま居眠りをする者などが続出していた。

「相変わらず長げえな、校長の話」

「ま、いいじゃねえか。おかげでこうして堂々と話が出るんだしよ」

「ま、そうだけだよ。ところで誠って携帯持ってたんだな」

誠ははっとしたように携帯電話をポケットから取り出して見せる。

「ああ、これか？親が心配だからって無理やり持たされたんだよ。全く親バカには参っちゃうよな、ほとんど使わないって言うのに」

「ふーん。でもあったほうが便利だよな」

「何だ、慶太は持っていないのか？」

「ああ、親父が中学生にそんなものは必要ないって怒鳴るんだよ。良雄と祐一は家が金持ちだから仕方ねえけど、俺たちのメンバーの中で持ってたのって俺とただけだぜ。いい加減、今の中学生の気持ちを察してほしいもんだよな。そのくせ姉ちゃんには買ってやるんだぜ。不公平だよな？」

何だかじくさい話をしてしまったと我ながら思って恥ずかしくなった。親父は女の子には心配だからという理由で携帯電話を買い与え、俺は男だから必要ないという理由だけで買ってもらえなかった。中学生ながらこの不公平さに憤慨していたのだ。

「ま、仕方ねえんじゃないのか？中学生じゃバイトもできねえし、結局親が全部金を出してくれるわけだろ？だったらそんなにわがまま言っちゃいけないよ。俺の場合は親が勝手によこしたからタダだけど、愛美と菊原はお年玉を携帯代に当ててるって聞いたぜ。みんな苦労しながら携帯持ってたんだよ」

「・・・そっか、そうだよな。何だかそうなように思えてきた。やっぱ誠は大人だよな、親の負担のことまで考えて」

「ハハ、そんなことないって」

「でもやっぱ携帯欲しいよなあ。なあ、メールってどうやるの？やって見せてよ」

俺が茶化しながら言うと、誠は携帯を開いて実演してくれた。俺はその画面に釘づけになった。初めて見る携帯の画面はまるで異次元のテレビゲームの中にでも迷い込んだように幻想的で神秘的な世界だった。祐一から来た返信に柄にもない絵文字がいくつにもなっていて並んでいるのを見て俺たち2人は大爆笑していたのである。

「うわゝ、寒っ」

神奈川県のある山奥にある七沢はビルの散在する東京と違って異常なまでに寒かった。これが本当に東京の隣かと疑ってしまうくらい。校長先生の出身が厚木市なためほかの学校が東京都内に行くのに対

し、うちの中学だけが厚木市民なら誰もが体験しているであろう七沢自然教室を林間学校と位置づけているのだ。

「相変わらずすごい山奥だな。良雄、本当にお前が言うお土産屋ってここにあるんだろうな？ 去年来たときはそんなもの全く見なかったぞ」

「あ、うん。多分大丈夫だと思うよ。二年前にはちゃんとあったから。ちよっと歩くんだけどね」

「おいおい二年前で大丈夫なのかよ？ 行ってみたら潰れてました、じゃ話にならねえんだぞ」

「大丈夫だって。葉山君を信じようよ、ね？」

俺たちは2人の目を見た。疑いの目で嘗め回すように。

「なーんか怪しいよな、お前ら。もしかして・・・」

「え、え？・・・何でもないよ？ ね、葉山君」

「う、うん」

2人の顔は真っ赤に染まっていた。もう俺たちにはこの2人がくつつくのも時間の問題だということを確認していたのだ。それ以上追及してもしようがないと思い、話題を変えようと誠が切り出す。

「そういえばここからウォークラリーだよな？ 愛美、地図あるか？」

「あ、うん。これ」

バックから取り出された地図には一つ一つ学校側が取り付けたチェックポイントが書かれている。問題を解きその答えとなるところが次の目的地なのだ。チェックポイントは全部回るのではなくおよそ3分の1を指示通りに辿る。決められているのは最初のチェックポイントだけなのである。

「最初は3番か、結構近いな。」

おし、とつとと達成しようぜ。

下手に時間かかると夕飯が食えなくなる」

「そうだな、行こう」

最初は順調だった、何もかも。大が余計な近道を発見しなければ。大は凹んで責められてから一言も言葉を発しない。なぜこんなことになってしまったのだろう。この状況の中で冷静さを保っていたのは誠と俺と愛美の3人だけ。良雄と祐一はひそひそと内緒話をしているし、夏希は怖がって愛美にしがみついているだけだ。辺りは暗さを増し、日が沈もうとしている。かれこれ2時間も迷っているというのに先生たちは何をしているのだ。そんな憤りさえ生まれてくる。

「ねえ、大丈夫かな？ 私たち、無事に帰れるのかな？」

「心配すんなよ、大丈夫だって。現に去年だって迷ったけど大丈夫だっただろ？」

「慶太、それは違うよ。去年は先生たちが探してくれて助けてもらったんでしょ？」

「あれ、そうだった？ そんな昔のこと、忘れちゃったよハハハハハハ——」

笑えなかった。余計によんだ空気が漂う。大は責任を感じているかもしれないが、それは俺たちも同罪だ。大の近道に賛同して付いていってしまったのだから。それに去年道に迷ったのも俺と誠が指揮を取って調子に乗りすぎたせいだ。誰も大を責めることなど出来るはずがなかった。

「ごめんね、みんな。俺のせいでこんなことになっちゃって……」

「何言ってるんだよ、大。お前らしくねえぞ、もっと元気におっしゃあとか言ってるよ。誰もお前を責めちゃいねえって」

「みんな……」

俺たちの頷く顔を見て涙ぐむ大。そこへ割り込むように今まで会話に参加していなかった祐一と良雄が前に出てきた。

「みんな、こっちだよ」

「は？ こっちって」

俺たちは意表を突かれたように目をぎょっとさせて良雄の顔を見

た。

「今、祐一君と話してたんだ。僕がここに来たことあるからどう
いう地形なのかって話し合ってた。それならこっちだって。ね、祐
一君」

「うん。僕の考えによると、こっちがゴールの広場の方角だよ。
本当はウォークラリーを終えてから行った方がいいんだけど、こ
うなったらそんなこと言ってられないでしょ？」

皮肉まじりな祐一の言葉にもちよつとした焦りを感じた。冬だ
というのに冷や汗を掻いているように見えた。相当焦っていたのだ
ろう。祐一の目は真剣そのものだった。

「行こう、2人を信じて」

祐一と良雄に先導されながら生い茂る枯れ草を掻き分けていくと、
たくさんの人影が顔面に飛び込んできた。

「おお、やった、やったぞ！」

俺たちは大喜びしてみんなで手を取り合いその場ではしゃぎま
くっていた。

案の定俺たちは長い間正座で先生に説教をくらった。携帯電話を
持っていないながら連絡もよこさなかったことを責められた。掛けな
かったのではなく、掛けられなかったのだ。動揺していてそこまで頭
が回るやつはいなかった。それに何より自分たちの手でどうにかし
たいという思いがあったのかもしれない。そんなことは面と向かっ
ては言えず、ただ先生の怒鳴り声をじっと聞き流していた。

「はあ、やっと終わった」

「こりや足が痺れて簡単には動けそうにないぜ」

「でもあと三十分でキャンプファイヤーだよ」

「えっ、もうそんな時間かよ？くそーっ、さすがにキャンプファ
イヤーには出てえよな」

「というかキャンプファイヤーに出れないと食事抜きだよ」

「そ、そうか。それじゃ無理にでも出ねえとな」

立ち上がろうとした瞬間、足に痺れが走って転んでいる俺。それを見て笑うみんな。何だかみんなと共有している時間が新鮮で、懐かしくもあった。どこかゆったりして動くときの不思議さに心地よさを感じていたのだ。

広場に集まると中央に燃え盛る炎のたいまつを中心に生徒が集まり、実行委員たちがバカみたいにたいまつを囲んで踊っていた。どうやら始まったばかりらしく俺たちはほっとしてクラスの輪に加わった。

「やっぱ林間学校はキャンプファイヤーがなけりや始まらないよな」

「本当だよ。これがなくちゃしらけちゃう」

キャンプファイヤーを囲みバーベキューが生徒ひとりひとりに配られる。食事をしながらみんな和気藹々と思いい出を語るのだ。去年は雨で室内でのキャンプファイヤーだったが、やはり外でのキャンプファイヤーはスケールが違う。俺たちは誰もが朗らかな気分で夜空に浮かぶ星々を眺めている。

「いつまでもこうして星を見ていられるといいよね」

「何だよ愛美、お前にそんなロマンチックな心があったんだな」

「何よ!」

「でもキレイ」

「そうだね。またこうしてみんなと夜空を眺めながら語り合える日が来るといいよね」

「なーに言ってるんだよ、良雄。来年もあるじゃねえか、来年がよ」

「そうだよ。僕らの友情は永遠だ、何があっても」

「そうだぜ。お前がいなくなったらおもしろいことも減っちゃうしな」

「また来年も一緒に見ようぜ。この場所、このメンバーで」

「うん」

俺たちの顔はいつになく穏やかだった。流れ星が通り過ぎる中俺たちは願った。

キャンプファイヤーを締めくくるフォークダンスを踊りながら。
触れ合う男女の手にドキドキと意識しながら。
いつまでも一緒にいられますようにと―――。

林間学校2日目。

朝日がやけに眩しかった。その眩しさに俺が目覚めると、目の前に誠の顔が飛び込んできた。

「わぁ！」

ドテンツ。ベッドから転げ落ちる俺を見て誠と後ろに隠れていた良雄は笑った。

「ハハハ、間抜けだな」

「ごめんね、慶太君。誠君がどうしてもって言うから」

「全く心臓が止まるかと思ったよ。何、もう朝食なわけ？」

「そうらしいぜ。さっき放送でそう言ってたから」

「そっか。・・・あれ、みんなは？」

「ああ、大は一番最初に起きて俺を起こしたら散歩してくるってどっか行っちゃったよ。」

何か昨日、女風呂覗こうとして愛美と菊原に見つかって散々だったらしいぜ」

「ばっかだな。ま、あいつらしいって言えばあいつらしいけど。じゃあ祐一は？」

「ほれ、後ろ見てみ」

誠の指差す方向を見ると毛布にくるまれて大きく膨らんでいるベッドが目映った。

「低血圧だから起きるのが辛いんだとよ。にしても布団かぶって寝るタイプだとは知らなかったな」

「ったくしょうがねえな。おい祐一、起きろ！」

叫び声にも一向に動じる気配がない。寝返りをうっているところを見ると狸寝入りしているみたいだ。そこで俺は良雄と誠に告げ言をした。俺たちは祐一のベッドを一斉に囲む。

「それ！」

「うわぁ！」

毛布を剥ぎ取られた祐一は俺が数分前にされたのと同じようにベツドから転げ落ち、俺たちの目を見た。本当に朝は弱いようで、祐一の顔色はやばいくらいに悪かった。くるまって寝ていたせいかな寝癖もついている。

「何するんだよ」

「それはこっちのセリフだろ？ いい加減起きて支度しろよ。これから朝飯食いに行くんだろ？」

「わかったよ。行けばいいんだろ、行けば」

祐一はゴキゲン斜めながらも俺と一緒にすばやく着替えを済ませると、部屋を出て食堂へと足を進ませていた。

「うわー、手がベタベタ」

「結構力いるんだな」

「去年もなかなかおもちつけなくて苦労したよね」

「そうそう。大が手を抜くの失敗して手が腫れちゃってな」

「あれは大変だったよな。大のやつ騒ぎまくって」

「ちよ、ちよっと俺のことはほっといてくれよ」

「ハハハハ、悪い悪い」

俺たちは朝食が終わると、七沢荘に戻り昼食の準備を開始していた。林間学校を締めくくる2大イベントのひとつ、うどん作り。班員がみんな協力し合ってその日の昼食を作るのである。クラスごとにメニューは違うようで2組はラーメン、3組は焼きそば、4組は焼肉、5組はおでんらしい。家庭科の授業と違って先生が教えてくれるわけでもなく、失敗する可能性も高いからサボりが出ようものならたちまち班員の厳しい視線が飛んでくる。

「こねるのは男子の役目だからね。ちゃんとやってよ」

「はいはい。ったく、愛美と結婚するやつに同情するぜ。絶対尻に敷くタイプだな、こりゃ」

「何か言った？」

「い、いえ」

小麦粉をこねるのはやってみると想像以上に力を要する。俺と誠と大は力に覚えがあるのでそれほど苦にならないが、祐一や良雄のような筋力のない男子ではとてもじゃないがこねられるようなレベルではなかった。現に戦力外とされた2人は女子と一緒に野菜を刻んだりなべ番に担当を当てられたりしていた。

「なあ、そろそろいいんじゃないか？」

「えっ、・・・そうだね。こんなもんかな。じゃあこの中に入れちゃって」

愛美が用意したなべのふたを開いた場所に俺たちはそおっと麺を投げ入れた。野菜や肉もその際に投げ込まれる。完成までには十分とかならなかった。

「おいしーい」

「うん、上出来かな」

「なーにが上出来かな、だよ。ちょっとは素直に夏希みたいにはめろって言うんだ」

「おい、ケンカはやめようぜ」

「そうだよ、せっかくのうどんがまずくなっちゃうよ」

「ちっ、わかったよ」

ふてくされたようにうどんを一気に流し込むと先に食べ終わっていた大がみんなの顔を窺いながらしゃべる。

「午後って合唱コンだよな？そのあと自由行動だっけ？」

「ああ、たしかそうだったと思うぜ。かったるいよなく、何で泊まりに来てまで歌歌わなきゃいけないんだよ」

「ま、いいじゃんか。そのあと自由行動なんだし」

「あっ！」

「ん？どうした、良雄？」

「・・・写真、写真撮ってないよ。自由行動でお土産屋さんに作ってもらおうキーホルダーに載せるための写真」

俺たちははっと思った。忘れていた、自由行動でキーホルダーを買ってことを。携帯カメラがあったためここにいるほとんどがカメラを持っていない。携帯のカメラでは何枚か取っているもののおそらくそれを使用することはできないだろう。

「大、お前ポラロイドカメラ持ってたよな？何枚撮った？」

「えっ、えっと・・・十二枚。だけどみんなそろって撮ったものは一枚もないよ」

「そっか・・・、それじゃ今撮ろう」

「そうだね、みんなが落ち着いて撮れるのなんて今しかなさそうだし」

「じゃあ並ぼう」

良雄の掛け声で俺たちは体を寄せ合って一枚のフレームに収まるようにピースをした。大がカメラを前に突き出し、カシヤツという音と同時に現像された一枚の写真が浮かび上がった。それはいつまでも続く笑顔と絆を風に乗せて鮮やかで輝く世界でたった一つの宝物のようにこの場にいる全員が思っていたに違いなかった。

「――振り向く日が――あゝるのさ――・・・」

パチパチパチパチッ。

「以上、2組。曲は『思い出がいっぱい』でした。続きまして1組による発表です。曲は『ともだち』、1組の皆さんに盛大な拍手でお迎えをお願いします」

ほかのクラス、先生たちの拍手とともに俺たちは壇上に上がった。指揮者Ⅱ良雄、ピアノ伴奏Ⅱ夏希による挨拶に物怖じしない良雄の新しい一面を発見した。緊張が走る中、良雄は一段高い指揮者台に立ち指揮棒を振り上げる。その姿にぐっと生唾を飲み込んで集中する。

クラスがひとつになるとき。下手でもいい、ミスしてもいい、ガラガラ声でもいい。とにかく心を歌にぶつけるんだ。魂の叫びはきつと届くはず。そう信じてタイミングを窺う。

指揮棒がピクツと動く、拍子に合わせて良雄の両腕が動いた。それに合わせるように息ぴったり、夏希の伴奏が流れ始める。

ふうっと深呼吸すると、自然と歌の出だしとタイミングが合う。メロディーに合わせてとにかく大きい声と気持ちを歌にぶつける。ホールを震えさせるくらいのパワーを。周りのことなんて関係ない。俺たちの結束力を見せるだけだ。

そう始まる前に誓い合った俺たち1組には誰一人恥ずかしがって口パクで済まそうなんてやつはいなかった。誰もが真剣そのもので、冬も近いというのに体から汗が溢れ出している者もいた。

お腹から声を出せと先生に散々言われてきたことで、合唱コンでは腹部が筋肉痛になる者も多い。それだけ真剣勝負なのだ。かったるいいいながらも、手を抜こうとするのではなく、最大のイベントで最高の結果を得ようと努力するのである。

「ア～アアア～アア～アア～ア～ア～ア～」

良雄が夏希の顔を見て合図する。曲はクライマックスに入る。力強い声、優しい声、暑苦しい声……。本当にこれが自分の歌声なのかと疑ってしまうくらい、精一杯自分を信じて歌い切る。

伴奏が終わる。それでも歌は続く。ラストには良雄の指揮にも力が入っているのが歌いながらひしひしと感じた。ゆっくりと丁寧に、でも大きく口を開けてお腹の底から声を出す。

「ターン、ターン、ターーーン！」

ワ～アアアアアターーーッ。

曲が終わった瞬間、歓声と拍手が鳴り響いた。やりきった、成功したと思うと、俺たちは一気に力が抜け、疲れが出ていた。青春って感じがして嬉しく、観客席に戻ると俺たちには笑顔しか残っていなかったのである。

「結局準優勝か」

俺は溜息をついて悔しがった。

「しょうがねえよ、4組マジでうまかったし」

「そうそう、悔やんでも仕方ないじゃん。それよりも最後なんだから自由行動を楽しもうよ」

「そうだな。で、良雄、肝心のお土産屋ってどこにあるんだよ？」
いつもながら祐一と一緒に2人離れて歩いている良雄の方に振り向いて俺は尋ねた。

「あ、ごめん。まだ言っていなかったっけ？この山道を降りて見えてくる青い屋根のお店がそうなんだけど・・・」

俺たちは坂道を下りながらその先に映る景色に目をやった。だが辺りは木々と道路ばかりでそれらしいものは見当たらない。

さらに下っていくと良雄は立ち並ぶ家の方を指してぼそりと呟いた。

「たしかこの辺なんだけどな・・・あ、もしかして・・・」

「ん？どうした、良雄。あったのか？」

「・・・ううん、違う。だけれどももしかしたらあの写真屋が昔お土産屋さんのあった場所かもって思ったんだ」

「写真屋？ま、いいや。気になるんなら行ってみようぜ」

「うん」

目の前に見える写真屋まで二百メートル。足早に写真屋の目の前で足を止めると、一人の店主と思われる老人の姿が目止まった。

「あ、あの・・・すみません」

「あ？何じゃ・・・何の用じゃ、客かい？」

「いえ、その・・・」

「俺たちここにあったはずのお土産屋を探してるんだよ。2年前、キーホルダーを作ってたって聞いて・・・」

老人は耳が遠いのか困惑しているのか、呆氣にとられた顔を見ると何かを思い出したように、目を見開いて口を開いた。

「ああ、それならわしじゃよ。わしがやっとなんじゃ、2年前までな」

「ほ、本当ですか？それじゃあキーホルダー、作ってもらえますか？」

「うーん、どうだろうな。なにせ2年前にほとんど処分してしまったからの」

「そうですか・・・」

俺たちは一斉にがっかりした。ここまで来たのに、最後の思い出と絆は報われないのか。老人はそんな俺たちの姿を見ると彼自身も残念そうな顔をしてはっきりした声を出す。

「どれ、探してくるから待ってなさい。もしかしたらまだ残ってるかもしれないの」

「作ってもらえるんですか？」

「材料さえ残っていればの」

「あ、ありがとうございます」

良雄の大きな心からのお礼に答えることなく老人は背を向けて写真屋の中に身を消していく。

十数分ほどすると老人はにっこりと笑顔で「あったぞ」と叫んだ。大喜びで写真を渡すこと一時間、真っ黒焦げになった老人が7つのキーホルダーを持って出てきた。

「これが友情の証のキーホルダーか」

「そうじゃ。一緒に映った者との絆は一生消えない。大切にすることがいいのう」

「本当に、ありがとうございます」

「こちらのほうこそわざわざ尋ねてきてもらって悪かったの。わしも久しぶりにあんたらみたいない強い絆で結ばれた少年たちを見れて嬉しかったぞ。またこっちに来ることがあったらそのときは寄ってくがいい。わしが生きている限りいつでも話し相手ぐらいにはなるんどの」

「はい、絶対に来ます」

俺たちは老人に手を振って別れを告げる。初体面なのにまるで友達のように接してくれた老人の姿が名残惜しく思えた。キーホルダーに映る笑顔の7人の姿。次に来たときは一緒に老人も映っていてほしい。この林間学校で学んだこと、それは紛れもなく出会いの素晴

らしさであると俺たちは確信していたのである。

林間学校が終わると辺りはすっかり冬。テストが終わったのも束の間、クリスマスにお正月と冬休みの予定を友達と話し合う日々で俺たち中学生は大忙しなのである。

「なあ、今年はクリスマスどうする？」

「どうするったっていつもどおり俺らの中でジャンケンして負けたやつの家でパーティーするってパターンなんだろう？」

「そうだよね、できれば藤堂君のおうちがいいなあ。おいしいご馳走たっくさん食べれるもんね」

「ちよつと菊原さん、僕の家はホテルじゃないんだよ？」

「ご、ごめ〜ん」

「・・・あ、あのさ、僕の家でやるっていうのはどうかな？」

もじもじしながら良雄が呟いた。はにかんだ顔で。

「いいのか、良雄？お前のうちでパーティーやるってことは食事を自分で用意しなくちゃいけないってことなんだぜ」

「うん、いいよ。どうせうちは夜遅くまで親もいないし、みんなと一緒にの方が楽しいから」

「そっか・・・、じゃあ良雄のうちに決定。みんなプレゼントは忘れんなよ」

良雄の家は都会のご真ん中にそびえ立つ高層マンションの一室にあった。何度も引越している人はもっと地味ないつでも転勤できる家に住んでいるのかと思っていたが、そんなことはない。立派で都会に住んでいる俺たちですら圧倒されるような家だった。大金持ちの祐一の家と比べても遜色はないと言えるほどだ。

「すっご〜い、ここが葉山君のおうち？」

ピンクのマフラーに緑色のセーターとチェックのスカートと毛糸の帽子をかぶった夏希は、手袋に包まれた両手をこすり合わせながら

白い息を吐いて感嘆を漏らした。

「うん。うち、マンションだからあんまり大きな声で叫ばないでね」
黒のジャンパーに紺のトレーナーとジーパンを着た良雄は静かで穏やかなトーンで笑いながら忠告した。

「わーってるって、心配すんなよ」

「そう言ってる慶太が一番心配なのよね」

「んだと。もう一偏言ってみろ」

「ほら、そうやって怒ると迷惑になるよ」

白のトレンチコートに茶色のセーターと紺のパンツを着込んだ愛美の注意に、紫のジャンパーに黒のトレーナーとジーパンを履いた普段は勝気の俺も言い返す言葉が見つからなかった。

「それにしても制服以外で俺たちが集まるってのも妙な感じだよな」
「そうだね。いっつも遊びにいくときまで制服だったからなんか開放感」

そういう誠は紺のロングコートにチェックのシャツとストライプのパンツを履いていてやっぱり大人な雰囲気を感じさせていた。大が黒のジャンパーに黒のセーターとジーパンという適当なコーディネートなのとは対照的でおかしく見えた。

「さ、みんな。寒いだろうし、遠慮せずに入ってよ」

「だな。それじゃお言葉に甘えてお邪魔しまゝす」

中に入ると、きれいに装飾されたインテリアが眩しく見えた。いや、装飾というよりは元からこういう色彩なのだろう。それでも一般家庭に生まれた俺たちには新鮮に見えたのだ。同じお金持ちでもお屋敷みたいな祐一の家とは違い、高級マンションに押し込められた水族館のようだ。ドアを開けた瞬間、どこでもドアで違う場所に連れて行かれたような錯覚に陥っていた。

「うわぁ、うまそう」

大は机の上に並ぶケーキや寿司、その他豪華な食卓に目移りしてよだれを垂らした。

「おい大、食べんのはまだ先だぞ」

「ちえ、わかってるよ」

俺たちは一人ずつテーブルを囲んで位置につく。それを見てすうつと深呼吸をすると、俺はみんなに諭すように言う。

「それじゃあ来年も俺たちの友情が途切れることがないように、いつまでも一緒にいられることを願って————乾杯！」

食事、プレゼント交換が終わると、みんな眠くなったようだった。

その寝顔はみんな満足げに夢の中に浸っている表情をしている。そんな中俺がただ一人ベランダで黄昏していると、誰かが窓を開けて後ろで立ち止まった。

「何だ良雄、お前も外の空気吸いに来たのか？」

良雄は黙ったまま隣の椅子に腰をかけた。

「慶太君・・・」

「何だ？」

「ありがとう」

「何だよ、改まって」

「慶太君に声をかけてもらえなかったら今の僕はいなかった。誠君とも祐一君とも大君とも間宮さんとも・・・、菊原さんともこんなに自然に話せることはなかったと思う」

「はは、なあ〜んだそのことか。でもさ、最初はむかついてたんだぜ、良雄のこと。いつまでもいじめられたからってうじうじしてんなってな」

良雄は苦笑いを悟られないように自然な笑みと朗らかな表情を作る。

「それでも・・・それでも慶太君はすごいよ。こんなとっつきにくい僕なんかを仲間に入れようとしてくれたんだもん。本当に慶太君と友達になれてよかった」

「良雄・・・」

「ねえ慶太君？もし・・・もしもだよ、僕がまた転校してどこか遠くに行っちゃっても友達でいてくれる？転校しても僕のこと忘れな

い？」

「・・・当ったり前だろ？俺は良雄とずっと友達でいる。何があっても、どこにいてもずっとずっと・・・」

「ありがとう」

何だかこんなくさい話をしてお互いに照れくさくなり吹き出してしまった。その先にひとつの流れ星を見た。俺たちの願いはたった一つしかないことはお互いわかりきっている。目をつぶって願った。いつまでも一緒にいられますように、いつまでも友達でいられますようにと。

「おはよう」

「おはよう。正月どうだった？」

「最高だったよ。お年玉もたくさんもらっちゃったし」

「俺も俺も。3万円ゲットしたぜ。けど不思議だよな、元旦に会ったばかりなのにこんなにみんなが懐かしく思えるなんて」

「ホントだよな。たった1週間のことなのにね」

3学期が始まった。中学2年の最後の学期とはいえ俺たちに受験という危機感はあるでもない。来年頑張ればいいやという気構えでいつもどおり過ごしている。3学期なんて単なる消化試合に過ぎない。1学期の社会見学や運動会、2学期の文化祭や林間学校のような特別な行事はない。あるのは学年末テストと2年生の集大成としての文集を書くことだけだ。

あっという間に過ぎる日々。俺たちは今、思春期の真っ只中を爆走中。止まることなど許されない何本にも分かれたヴィクトリーロードに向かって足を進める。それがあっているかどうかなんてわからない。不安に駆り立てられながらもその道を信じて突き進んでいるのだ。

中学生生活も残り半分を切った。何か思い出を残したいと誰もが願っている。どう形にしているのかもわからずに脇目も振らずまっすぐに歩いていく。

「じゃあこの問題わかる人」

「はい」

「それじゃあ藤堂君」

「y=2x+1だと思います」

「はい、正解。それじゃあ次の問題は――」

「まったく、勉強ができないからって何なんだよ。ホント、この時期

って点数稼ごうとして勉強してくるやつがいるからむかつくよな」

「ハハ、お前が言うどひがみに聞こえるよ。そんなに悔しいなら慶太も勉強すればいいじゃねえか」

「そうなんだけどさ、いざ机に向かおうとするとどうも横にあるドラゴンボールが睨んで来るんだよな。こっちにおいでみたいに手招きしてるみてえでさ」

「まあわからねえでもねえけどな。でも来年受験なんだしそろそろ真剣に考えねえとな、俺も慶太も」

「もつとゲームみたいだったらいいんだよなあ。ここまでできたらステージ1クリアとかさ」

「ハハ、それ大君らしいね。でもそれならもつと勉強頑張っちゃうかも」

「うんうん、わかる」

「まあわからなかったら僕が教えてあげるよ。人に教えることも勉強になるしね」

「何だよ祐一、そのトゲのある言い方」

俺が祐一の顔とにらめっこすると逆におかしくなって笑ってしまった。そのときふと良雄の姿が目に入る。

「おい良雄、どうしたんだよ？ そんなしょんぼりして」

「・・・え？ ううん、何でもないよ」

「あ、わかった。葉山君も勉強できなくて不安なんですよ？」

「う、うん。まあそんなとこ」

誠たちは良雄を励ますようにぽんつと背中を叩いて気合を入れた。それに反応していつものように明るく振舞っている。だが俺は見逃さなかった。笑顔の奥に悲しげな表情が浮かぶのを。

それから3週間が過ぎた。俺たちはテストに文集と大忙しである。今は文集のための作文を書く時間。周りの友達と何を書いているのが見せ合いっこしているやつらで溢れかえっている。

「良雄、お前は何書いてんだ？」

「えっ・・・、慶太君？」

「どうしたんだよ・・・、最近お前ちょっと変だぞ」

「変?・・・変じゃないよ、いつもどおりじゃん」

そういう良雄の態度はよそよそしかった。目が泳ぎ焦っている。いつも落ち着いた様子の良雄がここまで取り乱すのは夏希と2人で話しているときくらいなのに。

「ま、いいや。そんなことより何書いてんだよ？」

「あ、うん。その・・・、笑わないでよ？」

そう言っただけに原稿用紙を手渡す。俺は指でなぞるようにタイトルを読んだ。

「・・・親友との出会い?何だよ、笑わないでとか言うからもっと変なの想像してたのに普通じゃん」

「うん。慶太君たちとの思い出を書こうと思って。僕にとって初めて出来た友達だから」

「ふーん。ま、いいんじゃないの?ただ1年間全部書くわけにはいかねえだろうし、どうすんだよ？」

「うん、それでも僕は全部書きたい。だってこれが最後だから――」

「最後?」

俺は言葉の意味がわからなかった。良雄が何を言っているのかも。たしかに3学期が終われば2年は終わりだ。けどどちらの学校はクラス替えがない。来年もずっと友達でいられる。それを最後だなんて理解できなかった。

「良雄、どういうことだよ?俺たちはいつまでも一緒じゃなかったのか?ずっとずっと友達だって誓っただろ?それを裏切るって言うのか?」

「・・・ごめん、慶太君。でも慶太君には話さなきゃいけないよね」

俺は周りを見渡した。先生や誠たちがこっちを見ている。声を荒げて話していたのが聞こえたようだ。俺は良雄に「休み時間にゆっく

り続きを話そう」と小声で言うと、自分の席に戻っていった。

昼休み、俺と良雄は誠たちと外れて誰もいない教室で昼食を食べながら向かい合っている。お互い話し始めるタイミングを窺っている状態だ。そんな中先に口が動いたのは良雄の方だった。

「慶太君・・・、今まで黙っててごめん。その、いつ言おうか迷ってて言い出せなくて」

「そりゃあよ、いつかこうなるんじゃないかねえかって思ってたよ。でもさ、何で言ってくれなかったんだ？引越しのこと」

俺は良雄の口から引越しという言葉が出る前に問い正していた。ずっと前から思っていたきこちなさの正体はこれだったのだ。胸のつかえが取れたように口から吐き出されると、良雄は驚いたようにほつとした表情を見せた。

「・・・やっぱりわかってたんだね、引越しのこと」

「ああ。そりゃあわかるさ、お前の最近のよそよそしい態度見てりゃあ大体な。だてにこの1年お前のおもちゃってきてねえよ。・・・で、いつから決まってたんだ？やっぱクリスマスパーティーのときか？あんとき良雄、もしかしたらみたいなこと言ってたもんな」

ようやく落ち着いて話が出来るようになった俺が良雄の目を見て言うと、良雄は首を横に振り否定した。

「ううん、クリスマスのときはまだわかっていなかったよ。お正月に初詣に親と言ったときに言われたんだ、3月になったら転勤だって」

「・・・そっか、残念だよな。せっかく仲良くなれたのに」

良雄は不安そうにうつむく。これは何かを決心したときの表情だ。良雄はいつも決断を迫られて意見を言おうとするときこの顔をする。今までは何気なく見ていたこの表情に怖さと興奮を覚えた。何を言おうとしているのだろう。耳を塞ぎたいくらいだ。良雄は顔を上げるとすまなそうに声を挙げる。

「いままで、今までありがとう慶太君。そしてさようなら」

良雄の目にはうつすらと涙が浮かんでいた。友達と別れることの辛さ、孤独に戻ることに怖さ、物事は無常であるという儚さ……。

そんな思いがその涙に凝縮されていた。だがなぜか今の俺には同情してやれるほどの余裕はなかった。むしろひしひしと良雄に対して怒りの感情が湧いてきたのだ。なぜ湧いてきたのかはわからない。ただとてもじゃないが、素直に受け入れることは出来なかったのだ。その思いは最悪な形で爆発した。

「ふ、ふざけんな。お前言ったよな？もし引越して遠くに行っちゃってもずっと友達でいようって。それが何だよ、引越すって決まった途端俺たちを避けるようにしやがって。また昔みたいにどうせ一緒にいられないから友達なんかいらなんて切り捨てるのか？俺たちの友情ってそんな簡単に壊れるものだったのかよ？」

「ちが・・違うよ、慶太君。僕はそんなつもりじゃ・・・・」

「うるせえ、もうお前とは絶交だ。いいな、もう俺と口を利くんじやねえぞ」

俺自身何が何だかわからなくなっていた。頭に血が上って自分から突き放すようなことをしてしまった。こんなことが言いたかったんじゃない。俺は自分自身に初めて自己嫌悪という感情を抱き、ただひたすら後悔の念にかられていたのである。

「どうしたんだろうね、桂木君と葉山君」

「ああ、何でもケンカしたらしいぜ。もうあいつには愛想が尽きたって」

「慶太と良雄がケンカ？初めてじゃねえか、あいつらがケンカするなんてよ」

「そうだね、よっぽどのがあったんじゃないかな？」

誠たちが放課後、ちらちらこちらを見るのが気になって俺は席を立ち誠に言った。

「おい、そろそろ帰ろうぜ」

「いいけどよ、良雄は置いてくのか？」

「良雄？ほっとけよ、あんな薄情なやつ」

「薄情なやつ？」

「どうやらケンカしてるってホントみたいだね」

「あ、愛美、何か言ったか？」

「・・・うん、何も」

俺が一度睨みを利かすと愛美は黙り込んで俺の様子を窺っていた。俺はそんな自分が嫌いだった。薄情なのは俺の方だ。それを相手のせいにして・・・俺は最低だ。そんな自分を誰もわかってくれないと思っている俺も最低だ。こんな気持ちは初めてだった。自分のしでかしたことに罪の意識を感じ、心配そうな顔をして見つめてきた良雄の顔をまともに見ることさえ出来ずにいたのである。

「ただいまー」

家に帰ってくると、一足のスニーカーが目がいった。姉が帰ってきているらしい。美里姉ちゃんは中学3年生。授業は午前中で終わり誰もが受験勉強に精を注ぐ。普段は塾に通っている美里姉ちゃんも今日はたまたま休みらしい。俺は階段を駆け上り、部屋のドアを一目散に開けた。

「姉ちゃん、ただいまー」

「何よ慶太、入るときはノックくらいしてよね。こっちは受験勉強で忙しいんだから」

部屋の隅には美里姉ちゃんが脱ぎ捨てた制服が転がっていた。年頃の女子中学生だというのに美里姉ちゃんはあるときはTシャツにジャージ姿ととても人に紹介できるような姿ではない格好で問題集のページを一枚一枚めくりながら鉛筆を走らせているのだ。

「姉ちゃん、俺・・・」

「何、また相談？・・・いいよ、乗ったげる。だけど1回五百円だからね」

「・・・うん、わかってる」

「・・・今日はやけに素直ね。で、どうしたの？何があったのか

このお姉さんに言って御覧なさい」

普段は何かにつけて癪に障る姉の言葉も気にならなかった。それは自分自身がそれ以上にダメージを受けている証拠でもあった。うつむき加減の顔を上げて話を淡々と始める。

「姉ちゃん、俺・・・友達にひどいこと言っちゃったんだ。俺、どうしたらいいか・・・わからなくて・・・」

「どうということ？ちゃんと一から説明してよ」

俺は面倒でも姉に良雄との思い出と引越しのこと、俺が言ってしまった過ちの全てを説明した。その間美里姉ちゃんはうんうんと頷くだけ。全部説明し終わったところで姉のツツコミが入った。

「うーん、何かそれってさ慶太のわがままなんじゃないの？だって引越すのは友達の意味じゃないでしょ？」

「そ、それはそうだけど・・・でもそれじゃあどうすればいいって言うんだよ」

「そうだねー、・・・何か思い出作りが出来ればいいんじゃない？ずっと自分たちは友達なんだよって思い出作り」

「思い出作り？」

「そっ。例えばそうだねー、映画作りとか」

「映画？」

「うん。その友達ってクラスに好きな子がいるんでしょ？だったら友達を主人公にして女の子をヒロインにした恋愛映画なんていいと思うけどなー。何か離れ離れになっても好きでいるよって感じでロマンチックくっつけて感じがするでしょ？」

「姉ちゃん、それ自分がなりたいって願望じゃない？」

「へへ、ばれた？ま、とにかく姉としてアドバイスできるのはこれくらい。あとは慶太、あんた次第だよ」

「わかった、いろいろありがとう姉ちゃん」

不器用ながらも弟の俺を応援してくれる美里姉ちゃんの心遣いが嬉しかった。初めてきょうだいがいてよかったと思えた。くすぶっていたもやもやが解消され、帰ってきたときよりも俺の心は澄んだ

青で統一されていたのである。

「おい、良雄」

俺は登校してくると一目散に良雄に声をかけた。良雄自身もビツクリした様子で声を失っている。

「その、何て言うか・・・、ごめん。俺が悪かった、許してくれ」
良雄の机に向かって頭をこすり合わせる俺を見て誠たちも周りに集まってきた。

「ううん、僕の方こそ慶太君の気持ちをわかってあげられなくてごめん」

「・・・何か話が見えてこねえんだけどよ、結局お前らがケンカしてた理由ってなんだったんだよ？」
誠は俺たちに近寄って間に入った。

「ごめん、みんなにも言わなきゃいけなかったんだけど・・・」
「いいよ良雄、俺から言う。・・・良雄、また引越すんだってさ。3学期が終わったら」

「えっ?!」

誠と祐一と大と愛美と夏希は声をそろえて驚きの表情を見せた。次第に笑顔から落胆の表情に変わる。

「マジなのか？」

「うん」

「それじゃあ慶太が怒るのも無理ないよね。急にだもん、せつかく仲良くなれたのに」

「でも何で急に仲直りしようと思ったんだ？」

「・・・そんなことしてても仕方ないってわかったから」

「仕方ない？」

「ああ。姉貴が教えてくれたんだ、遠くに行ったら友達じゃないって言うのはその人のわがままだって。だからもう迷わない。俺と良雄はずっとずっと友達だ、何があっても」

「慶太君・・・」

誠たちも同じように良雄の顔を見てひとりずつ良雄の手を握った。俺たちも同じ気持ちだと言うかのように。

「それでさ、みんなにちょっと提案があるんだけど・・・」

「何だよ、言ってみろよ慶太」

「映画を作りたいんだ、良雄と夏希を主人公にした思い出作りの映画を」

「映画？そんなの俺たちに作れんのかよ、ただの中学生の俺たちに」

「ああ、絶対作ってみせる。良雄のためにも、俺たちのためにも。みんな、協力してくれるか？」

俺の呼びかけにみんなはそろえて首を縦に振る。

「当たり前じゃないか。どこに友達思いのお前の提案を断る理由があるんだよ」

「そうだぜ、いつもお前のおかげで俺たちはここまでやってきたんじゃねえか」

「慶太君、ありがとう。僕なんかのためにこんな・・・」

「何だよ良雄、泣くなよ。俺たちはいつも一緒だ。笑って送り出してやるんだから向こう行っても俺たちのこと忘れんじゃねえぞ」

「うん」

次の日から映画制作の準備が始まった。監督を俺が担当し、愛美が脚本を手がける。祐一がカメラを用意し、パソコンで俺と一緒に編集作業を担当する。大が大道具と照明を担当してくれた。誠は良雄の恋のライバル役として出演。3人だけだと物語が成立しないので、俺と愛美と大と祐一も俳優になったつもりで参加。クラスの何人かに声をかけ、エキストラとして出演してもらう。

1時間のショートムービーとはいえ、初心者の俺たちには困難がつきものだった。カメラアングルの使い方や演技指導などわからないことだらけ。2月中旬から撮り始めた映画はそれでも順調に進み、3月上旬には残り1シーンとなっていた。

「僕、僕はずっと前から君のこと……めぐみさんのことが好きでした」

「ハイ、カット！」

抱き合っで見つめ合う2人。キスをするかしないかというシーンで撮影は終了した。片想いの少年が離れ離れになる前に告白する。愛美の脚本はまさに良雄の恋そのものを映し出していた。

「お疲れ」

「ありがと、愛美。どうだった、私の演技」

「最高だったよ。何だかホントの恋人同士みたいだった」

「へへっ。ところで葉山君は？」

「ああ何か慶太たちが男だけで祝勝会やるって言ってたけど」

「よくやったな、良雄」

「ホント、頑張った。あとは終業式の時のお別れ会で上映するだけか」

「寂しくなるよな」

「良雄、僕たちのこと……絶対忘れるなよ」

演技を終えた良雄は爽やかに返事をした。その姿を見てほっとしながらも俺は良雄の肩をぽんっと叩く。

「今度はお前の番だな」

「えっ？」

「えってわかってるんだろ？このままじゃいけないって」

「だな。このまま菊原に告白しないままあっち行ったら一生後悔するぜ」

良雄はうつむいていて少し考えると、言葉を発した。

「うん、そうだねそうだよね。僕が勇気を出さなきゃいけないんだよね」

「ああ。大丈夫だって、お前らいい感じなんだからさ。チャンスは一度、上映が終わったあとの挨拶のときだぜ」

三月二十四日、終業式当日。ほかの誰にとっても取り立てて特別な日ではない。ただ成績が返されては結果に一喜一憂し、学年が上がるくらいにしか思っちゃいない。だけど俺たちは違う。大切な友との別れが待ち受けている。永遠の別れではない。それは1年早く訪れる一人だけの卒業という意味合いに近いもの。それでもこんな日が来ることを俺たちは恐れていた。でも笑顔で見送らなくちゃいけない。それが彼のためだから。

終業式が終わってほかのクラスは学年最後のホームルームが行われている。そんな中で俺たちは先生に許可を得て良雄のお別れ会を執行していた。パントマイムをやる者、マジックをやる者、アクロバットをやる者、歌を歌う者、演奏をする者、手紙を読む者……。それぞれが思い思いに良雄を笑顔で見送ってやろうと必死に練習してきた演技を披露する。

そして――――。

「最後になりました。桂木慶太君監督、間宮愛美さん脚本、主演葉山良雄君と菊原夏希さんによる映画を上映いたします。タイトルは『LAST SCENE』です」

映画は教室のテレビを通して映し出され、あっという間に1時間の上映を終えた。クラスメイトからは涙の拍手が鳴り止むことはなかった。

成功――。そんな言葉が頭をよぎり俺たちは何だか照れくさかった。上映が終わると、映画の試写会の舞台挨拶のように7人そろって前に立つ。

「えー、えっと……。みんなありがとう。俺は良雄と出会えてよかった。良雄は俺の最高の友達です。それは今もこれからもずっと変わらない。そんな思いをこの映画に込めました」

観衆から冷やかしの声が飛ぶ。

「えー、それから良雄からみんなに言いたいことがあるそうです。ほら、良雄……」

良雄はマイクを取り咳払いをしてから言葉を選ぶ。

「・・・みんな、僕のためにいろいろありがとう。とっても楽しかったです。向こうに行ってもみんなのことは忘れません。手紙書きます。そして、僕は慶太君たちと友達になれて本当によかった。慶太君たちに出会わなければ僕は、僕は・・・」

良雄の目からは大量の涙が溢れ出ていた。それは嬉しさも悲しさも全部全身から滲み出てくるような涙だった。俺は良雄からマイクを借りて良雄に言葉をぶつける。

「おい良雄、まだ泣くのは早いぞ。お前、まだ言い足りないことがあるんだろ？」

俺は涙が出るのを必死に歯を食いしばってこらえていた。自分が泣いてはいけないと言い聞かせながら。良雄は再びマイクを持って夏希の目を見る。

「・・・菊原さん、・・・僕、君に言わなきゃいけないことがあるんだ」

夏希は哑然とした表情で良雄を見つめている。

「僕、僕は・・・菊原さんのことが・・・、夏希さんのことが・・・好きです。ずっと前から・・・今でも・・・これからずっとずっと」

涙声になりながら良雄の気持ちは教室中に響き渡っていた。映画を先に見ていたからかもしれない。クラスの誰一人、ヤジを飛ばそうと思うものはいず、真剣に2人の恋の様子を見守ってくれたのに俺たちは心の中で感謝した。

「・・・ありがとう。私も・・・私も葉山君のこと好きだよ。誰よりもずっと、・・・ずっと、良雄君のことが好き」

2人はお互いの告白に動揺しながらも身を寄り添った。誰の目も気にしなかった。みんなのしている目の前で抱き合い唇と唇を重ね合わせる事が出来たのは映画のおかげかもしれない。

映画では語られなかったヒロインの返事、その後の結末・・・。2人の片想いの物語はここでラストシーンかもしれない。しかしこの

先には新しい未来が待っている。俺たちの友情は決して壊れることなくこれからも続いていく。終わらない物語のはじまりに俺たちは笑顔で離れていく友を祝福し、紙吹雪を2人に向かって投げつけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1637k/>

LAST SCENE

2010年10月9日08時23分発行